

マルコ傳福音書

イ 大四・三を見よ	→ 馬三・一 太二・一	登一・九	ワ 太二・二三 路二・	ソ 大四・二三を見よ
ロ 約一七・三、二〇	一〇 路七・二七	ル 察四・三 耳二・二	五 一	ツ 但九・二五 加四・四
三一 羅一・四	ト 察四〇・三 太三・三	八 徒二・四、一〇	カ 太三・一七を見よ	弗一・一〇 提前二
ハ 路二・二〇、一一	路三・四 約一・二三	・四五、一一・一五、	ヨ 一二、二三 大四・一	六 多一・三
ニ 路一六・一六 約三	チ 路一・七七 徒三・二	一六 哥前一二・一	一 一 路四・一	
三六	・二六	三	一三	
ホ 二一八 太三・一一	リ 徒一三・二四	チ 九・一一 太三・一	タ 大四・一〇を見よ	
一一 路三・二一一	又 徒二八・一三 大 三	三 一 一七 路三・二	三 一 二三	
六	六 雅五・一六 約	一 一 二二	レ 大四・一一	

第一章

一 神の子イエス・キリストの福音の始。
 二 預言者イザヤの書に、「視よ、我なんぢの顔の前に、わが使を遣す、彼なんぢの道を設くべし。三 荒野に呼はる者の聲す「主の道を備へ、その路すぢを直くせよ」と録されたる如く、四 バプテスマのヨハネ出で、荒野にて罪の赦を得さする悔改のバプテスマを宣傳ふ。五 ユダヤ全國またエルサレムの人々、みな其の許に出で來りて罪を言ひあらはし、ヨルダン川にてバプテスマを受けたり。六 ヨハネは駱駝の毛織を著、腰に皮の帶して、蝗と野蜜とを食へり。七 かれ宣傳へて言ふ「我よりも力ある者、わが後に來る。我は屈みて、その鞋の紐をとくにも足らず、八 我は水にて汝らにバプテスマを施せり。されど彼は聖靈にてバプテスマを施さん」
 九 その頃イエス、ガリラヤのナザレより來り、ヨルダンにてヨハネよりバプテスマを受け給ふ。一〇 斯て水より上るをりしも、天さけゆき、御靈、鴿のごとく己に降るを見給ふ。一一 かつ天より聲出づ「なんぢは我が愛しむ子なり、我なんぢを悦ぶ」
 一二 斯て御靈ただちにイエスを荒野に逐ひやる。一三 荒野にて四十日の間サタンに試みられ、獸とともに居給ふ、御使たち之に事へぬ。
 一四 ヨハネの囚れし後、イエス、ガリラヤに到り、神の福音を宣傳へて言ひ給ふ、一五 時は満てり、神の國は近

づけり、汝ら悔改めて福音を信ぜよ』

一六 イエス、ガリラヤの海にそひて歩みゆき、シモンと其の兄弟アンデレとが、海に網投ちをるを見給ふ。か

一七 れらは漁人なり。一七 イエス言ひ給ふ『われに従ひきたれ、汝等をして人を漁る者とならしめん』一八 彼ら直ちに網

一八 をすてて従へり。一九 少し進みゆきて、ゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネとを見給ふ、彼らも舟にありて網を

二〇 繕ひゐたり。二〇 直ちに呼び給へば、父ゼベダイを雇人とともに舟に遺して従ひゆけり。

二一 斯て彼らカペナウムに到る、イエス直ちに安息日に會堂にいりて教へ給ふ。二三 人々その教に驚きあへり。

二二 それは學者の如くならず、權威ある者のごとく教へ給ふゆゑなり。二三 時にその會堂に、穢れし靈に憑かれたる人

二四 あり、叫びて言ふ、『ナザレのイエスよ、我らは汝と何の關係あらんや、汝は我らを亡さんとて來給ふ。われは

二五 汝の誰なるを知る、神の聖者なり』二五 イエス禁めて言ひ給ふ『黙せ、その人を出でよ』二六 穢れし靈、その人を

二七 痙攣けさせ、大聲をあげて出づ。二七 人々みな驚き相問ひて言ふ『これ何事ぞ、權威ある新しき教なるかな、穢れ

二八 し靈すら命すれば従ふ』二八 爰にイエスの噂あまねくガリラヤの四方に弘りたり。

二九 會堂をいで、直ちにヤコブとヨハネとを伴ひて、シモン及びアンデレの家に入り給ふ。三〇 シモンの外姑、

三〇 熱をやみて臥しゐたれば、人々ただちに之をイエスに告ぐ。三一 イエス往きて、その手を取り、起し給へば、熱さ

三二 りて女かれらに事ふ。

三三 夕となり、日いりてのち人々すべての病ある者・悪鬼に憑かれたる者をイエスに連れ來り、三三 全町こぞり

イ徒二〇・二二 ハ二一・二八 路四・へ太二・二三 可一〇 ト太八・二九を見よ 又可一〇・二四、三二、三八、三九
口一六・二〇 太四・ 三一・三七 四七、一四・六七、チ路一・三五、四・三 一四・三三、一六・ ナ可一・二一、二三、カ太四・二四を見よ
一八一・二二 路五・ 二太四・二三を見よ 一六・六 路四・三 四 約六・六九 徒 五、六 五三二・三四 太八・
二一・一 約一・四 可一・三九、一〇・二 四、二四・一九 徒 三・二四 三・二四 太八・ 一六、一七 路四・
〇一四二 ホ太七・二八を見よ 二四・五 四、一五 路四・ 四〇、四一

夕大四・二三を見よ 四二・四三 四 四
 レ可三・一二 路四・四 ツ太一四・二三を見よ ナ太四・二三を見よ ム可一〇・一七(太八) 七 路五・一七 約 一八 路五・一八一
 一(徒一六・一七、 路五・一六、二三、 ラ四〇―四四 大八・ ウ太八・四を見よ オ可一・四五を見よ 二六 二六
 一八) 三二 來五・七 二一四 路五・二二 井太八・四を見よ ク太四・二三 西一・五 マ太四・二四を見よ
 ソ三五―三八 路四・ ホ賽六一・一 約一七 一四 一四 ノ可二・二、一三、三、 ヤ三一・二二 大九・二 ケ路五・一九

三四 門に集る。三四 イエスさまさまの病を患ふ多くの人をいやし、多くの悪鬼を逐ひいだし之に物言ふことを免し給はず、悪鬼イエスを知るに因りてなり。

三五 朝まだき暗き程に、イエス起き出でて、寂しき處にゆき、其處にて祈りゐたまふ。三六 シモン及び之と偕にをる者ども、その跡を慕ひゆき、三七 イエスに遇ひて言ふ『人みな汝を尋ぬ』三八 イエス言ひ給ふ『いざ最寄の村々に往かん、われ彼處にも教を宣ぶべし、我はこの爲に出で來りしなり』三九 遂にゆきて、徧くガリラヤの會堂にて教を宣べ、かつ悪鬼を逐ひ出し給へり。

四〇 一人の癩病人、みもとに來り、跪つき請ひて言ふ『御意ならば我を潔くなし給ふを得ん』四一 イエス憫みて、手をのべ彼につけて『わが意なり、潔くなれ』と言ひ給へば、四二 直ちに癩病さりて、その人きよまれり。

四三 頓て彼を去らしめんとて、嚴しく戒めて言ひ給ふ、四四 『つつしみて誰にも語るな、唯ゆきて己を祭司に見せ、モ一セが命じたる物を汝の潔のために獻げて、人々に證せよ』四五 されど彼いでて此の事を大に述べつたへ、徧く弘め始めたれば、この後イエスあらはに町に入りがたく、外の寂しき處に留りたまふ。人々、四方より御許に來り。

第二章

一 數日の後、またカペナウムに入り給ひしに、その家に在すことを聞きて、二 多くの人があつまり來り、門口すら隙間なき程なり。イエス彼らに御言を語り給ふ。三 ここに四人に擔はれたる中風の者を人々つれ來る。四 群衆によりて御許にゆくこと能はざれば、在す所の屋根を穿ちあけて、中風の者を床のまま

六五 縋り下せり。五 イエス彼らの信仰を見て、中風の者に言ひたまふ『子よ、汝の罪ゆるされたり』六 ある學者たち
 七 其處に坐しゐたるが、心の中に、七『この人なんぞ斯く言ふか、これは神を瀆すなり、神ひとりの外は誰か罪を赦
 八 すことを得べき』と論ぜしかば、八 イエス直ちに彼等がかく論ずるを心に悟りて言ひ給ふ『なにゆゑ斯ることを
 九 心に論ずるか、九 中風の者に『なんぢの罪ゆるされたり』と言ふと『起きよ、床をとりて歩め』と言ふと、孰か
 一〇 易き。一〇 人の子の地にて罪を赦す權威ある事を、汝らに知らせん爲に』——中風の者に言ひ給ふ——『なんぢ
 一一 に告ぐ、起きよ、床をとりて家に歸れ』一二 彼おきて直ちに床をとりあげ、人々の眼前いで往けば、皆おどろき、
 一三 かつ神を崇めて言ふ『われら斯の如きことは斷えて見ざりき』
 一四 三 イエスまた海邊に出でゆき給ひしに、群衆みもとに集ひ來りたれば、之を教へ給へり。一四 斯て過ぎ往くと
 一五 き、アルパヨの子レビの、收税所に坐しをるを見て『われに従へ』と言ひ給へば、立ちて従へり。一五 而して其の
 一六 家にて食事の席につき居給ふとき、多くの收税人・罪人ら、イエス及び弟子たちと共に席に列る、これらの者お
 一七 ほく居て、イエスに従へるなり。一六 パリサイ人の學者ら、イエスの罪人・收税人とともに食し給ふを見て、その
 一七 弟子たちに言ふ『なにゆゑ收税人・罪人とともに食するか』一七 イエス聞きて言ひ給ふ『健かなる者は、醫者を要
 一八 せず、ただ病ある者、これを要す。我は正しき者を招かんとにあらで、罪人を招かんとて來れり』
 一八 一八 ヨハネの弟子とパリサイ人とは、斷食しゐたり。人々イエスに來りて言ふ『なにゆゑヨハネの弟子とパリ
 一九 サイ人の弟子とは斷食して、汝の弟子は斷食せぬか』一九 イエス言ひ給ふ『新郎の友だち、新郎と偕にをるうちは

イ大九・二を見よ 二 徒五・三一 九一・二三 路五・二 二、一五・一、一九 九 大九・二、一三 路 一・一五
 口(喇七・六、二五) 尼 ホ大九・八を見よ 七・三三 二 一八・一二 太九・ 七・五 太六・一六
 八・四 へ大九・三三 一 一四・一七 路五・ 路一八・二二
 八 徒四三・二五 但九 一 可一・四五を見よ 又太八・二二を見よ 一五 路一三・三 三三・三八
 九 一 四一・一七 大九・ 一 太一〇・三 路三・一 一 太九・一 一 徒三・一九 提前一 一 祭五八・三十七 函

ソ太九・二五 路五・ 二〇 母後八・一七 才大八・二〇を見よ マ太二・一〇 路六・一〇 路六・一〇
 三五 三太二・二を見よ ウ利二四・九 ク一六 太二・九 七 約八・六 (路) コ太二・二六を見よ 一七
 ツ二二・一八 太一 ラ母前二一・三一六 井出二三・一二中五・ 一四 路六・六一 エ七・一二 太二・二
 二・二一八 路六・ 代上二四・六(母前) 一四 賽五八・二三 一五、一六 路六・一
 一一五 二一・二二、二三、ノ西二・二六 ヤ可一・二一、三九 二〇・二〇 七一九

断食し得べきか、新郎と偕にをる間は、断食するを得ず。二〇 然れど新郎をとらるる日きたらん、その日には断食

せん。二 誰も新しき布の裂を舊き衣に縫ひつくることは爲じ。もし然せば、その補ひたる新しきものは、舊き物

をやぶり、破綻さらに甚だしからん。三 誰も新しき葡萄酒を、ふるき革囊に入ることは爲じ。もし然せば、葡

萄酒は囊をはりさきて、葡萄酒も囊も廢らん。新しき葡萄酒は、新しき革囊に入るなり

三三 イエス安息日に麥島をとほり給ひしに、弟子たち歩みつつ穂を摘み始めたれば、二四 パリサイ人、イエスに

言ふ「視よ、彼らは何ゆゑ安息日に爲まじき事をするか」二五 答へ給ふ「ダビデその伴へる人々と共に乏しくして

飢ゑしとき爲しし事を未だ讀まぬか。二六 即ち大祭司アピアタルの時、ダビデ神の家に入りて、祭司のほかは食ふ

まじき供のパンを取りて食ひ、おのれと偕なる者にも與へたり」二七 また言ひたまふ「安息日は人のために設けら

れて、人は安息日のために設けられず。二八 然れば人の子は安息日にも主たるなり」

第三章

一 また會堂に入り給ひしに、片手なえたる人あり。二 人々イエスを訴へんと思ひて、安息日にかの
 人を醫すや否やと窺ふ。三 イエス手なえたる人に「中に立て」といひ、四 また人々に言ひたまふ

『安息日に善をなすと惡をなすと、生命を救ふと殺すと、孰かよき』彼ら默然たり。五 イエスその心の頑固なる

を憂ひて、怒り見回して、手なえたる人に「手を伸べよ」と言ひ給ふ。かれ手を伸べたれば癒ゆ。六 パリサイ人

いでて、直ちにヘロデ黨の人とともに、如何にしてかイエスを亡さんと議る。

七 イエスその弟子とともに、海邊に退き給ひしに、ガリラヤより來れる夥多しき民衆も従ふ。又ユダヤ、

ハ エルサレム、イドマヤ、ヨルダンの向の地およびツロ、シドンの邊より夥多しき民衆その爲し給へる事を聞き
 〇九 て、御許に来る。九 イエス群衆のおしなやますを逃れんとて、小舟を備へ置くことを弟子に命じ給ふ。一〇 これ多
 二 くの人を醫し給ひたれば、凡て病に苦しむもの、御體に觸らんとて押迫る故なり。二 又また穢れし靈イエスを見る
 三 毎に、御前に平伏し、叫びて『なんぢは神の子なり』と言ひたれば、三 我を顯すなとて、嚴しく戒め給ふ。
 四 三 イエス山に登り、御意に適ふ者を召し給ひしに、彼ら御許に来る。四 爰に十二人を擧げたまふ。是かれら
 五 六 を御側におき、また教を宣べさせ、五 惡鬼を逐ひ出す權威を用ひさする爲に、遣さんとてなり。六 此の十二人を
 七 擧げて、シモンにペテロといふ名をつけ、七 ゼベダイの子ヤコブ、その兄弟ヨハネ、此の二人にボアネルゲ、即ち
 八 雷霆の子といふ名をつけ給ふ。八 又アンデレ、ピリポ、バルトロマイ、マタイ、トマス、アルパヨの子ヤコブ、
 九 タダイ、熱心黨のシモン、九 及びイスカリオテのユダ、このユダはイエスを賣りしなり。
 一〇 斯てイエス家に入り給ひしに、一〇 群衆また集り來りたれば、食事する暇もなかりき。一一 その親族の者これを
 一三 聞き、イエスを取り押へんとて出で來る、イエスを狂へりと謂ひてなり。一三 又エルサレムより下れる學者たちも
 一三 『彼はベルゼブルに憑かれたり』と言ひ、かつ『惡鬼の首によりて惡鬼を逐ひ出すなり』と言ふ。一三 イエス彼ら
 一四 を呼びよせ、譬にて言ひ給ふ『サタンは、いかでサタンを逐ひ出し得んや。一四 もし國分れ争はば、其の國立つ
 一六 こと能はず。一五 もし家分れ争はば、其の家立つこと能はざるべし。一六 若しサタン已に逆ひて分れ争はば、立つこ
 一七 と能はず、反つて亡び果てん。一七 誰にても先づ強き者を縛らずば、強き者の家に入りて其の家財を奪ふこと能は

イ(番一五・一、二一 二可五・二五 路七・ へ大四・三を見よ 七 路九・一 一六 徒一・一三 一三、三・七等 ツ太一〇・二五を見よ ラ可四・二 (太一三・
 結三五・一五、三六 二一 ト太八・四を見よ 又路六・一三を見よ 又太一〇・四を見よ ヨ可六・三二 三三二 三三二等) 三三二
 (五) 可五・二七、二八、 六・五六、八・三二 七 路六・二二 (大五・ (可六・三〇) 九・二八) 八 太一〇・二〇 徒二 一三・二七、二九 路一 一・一七、二二
 口太一一・二一を見よ 六・五六、八・三二 一 一六・一、九、太一〇 九・二八) 六・二四 二五・一〇を見よ 二五(賽四九・二四、二
 八太四・二三を見よ 太一四・三六を見よ リ太一〇・一 可六・ 二一、四 路六・一四 可一・四五、二・四、 ソ太一五・一を見よ 一・一七、二二

井二八―三〇 太二二
 ・三二、三三 路二二
 ・一〇
 ノ来一〇・二九
 才三二―三五 太二二
 四六一五〇 路八
 ・二九―二二
 ・一〇
 一―一五 路八・四
 一―一〇
 ヤ可二・一三、三・七
 マ(太二三・一四) 路五・
 コ(約一五・五 西一・
 六)
 ア可四・二を見よ
 エ太二一・一五を見よ
 サ太二三・一四を見よ
 二―三三(等)
 フ(太二三・一四)
 西四・五 撒前四・
 一二 提前三・七
 二―三三(等)
 二―三三(等)
 二―三三(等)

二八 じ、縛りて後その家を奪ふべし。二八 誠に汝らに告ぐ、人の子らの凡ての罪と、けがす瀆とは赦されん。二九 然れど
 三〇 聖靈をけがす者は、永遠に赦されず、永遠の罪に定めらるべし。三〇 これは彼らイエスを「穢れし壁に憑かれた
 り」と云へるが故なり。

三二 爰にイエスの母と兄弟と來りて外に立ち、人を遣してイエスを呼ばしむ。三三 群衆イエスを環りて坐したり
 三三 しが、或者いふ「視よ、なんぢの母と兄弟・姉妹と外にありて汝を尋ぬ」三三 イエス答へて言ひ給ふ「わが母、わ
 三四 が兄弟とは誰ぞ」三四 斯て周圍に坐する人々を見回して言ひたまふ「視よ、これは我が母、わが兄弟なり。三五 誰に
 ても神の御意を行ふものは、是わが兄弟、わが姉妹、わが母なり」

第四章

一 イエスマた海邊にて教へ始めたまふ。夥多しき群衆、みもとに集りたれば、舟に乗り海に泛びて
 二 坐したまひ、群衆はみな海に沿ひて陸にあり。ニ 譬にて數多の事ををしへ、教の中に言ひたまふ、
 三 「聽け、種播くもの、播かんとて出づ。四 播くとき、路の傍らに落ちし種あり、鳥きたりて啄む。五 土うすき
 七六 饒地に落ちし種あり、土深からぬによりて、速かに萌え出でたれど、六 日出でてやけ、根なき故に枯る。七 茨の
 八 中に落ちし種あり、茨そだち塞ぎたれば、實を結ばず。八 良き地に落ちし種あり、生え出でて茂り、實を結ぶこ
 九 と、三十倍、六十倍、百倍せり」九 また言ひ給ふ「きく耳ある者は聽くべし」
 一〇 イエス人々を離れ居給ふとき、御許にをる者ども、十二弟子とともに、此等の譬を問ふ。二 イエス言ひ給
 三 ふ「なんぢらには神の國の奧義を與ふれど、外の者には、凡て譬にて教ふ。三 これ「見るとき見ゆとも認めず、

一三 聽くとき聞ゆとも悟らず、翻へりて赦さるる事なからん』爲なり』^(一) 二四 また言ひ給ふ『なんぢら此の譬を知らぬか、
 二五 然らば争でもろもろの譬を知り得んや。』^(二) 二六 播く者は御言を播くなり。』^(三) 二七 御言の播かれて路の傍らにありとは、斯
 二八 る人をいふ、即ち聞くととき、直ちにサタン來りて、その播かれたる御言を奪ふなり。』^(四) 二九 同じく播かれて磽地にあ
 三〇 りとは、斯る人をいふ、即ち御言をききて、直ちに喜び受くれども、^(五) 三一 その中に根なければ、ただ暫し保つ
 三二 み、御言のために、患難また迫害にあふ時は、直ちに躓くなり。』^(六) 三三 また播かれて茨の中にあるとは、斯る人をい
 三四 ふ、^(七) 三五 即ち御言をきけど、世の心勞、財貨の惑、さまざまの慾いりきたり、御言を塞ぐによりて、遂に實らざる
 三六 なり。』^(八) 三七 播かれて良き地にありとは、斯る人をいふ、即ち御言を聽きて受け、三十倍、六十倍、百倍の實を結ぶ
 三八 なり』

二一 二二 また言ひたまふ『升のした、寢臺の下におかんとて、燈火をもち來るか、燈臺の上におく爲ならずや。
 二三 二四 それ顯はるる爲ならず、隠るるものなく、明かにせらるる爲ならず、秘めらるるものなし。』^(九) 二五 聽く耳ある者は
 二六 二七 聽くべし』^(一〇) 二八 また言ひ給ふ『なんぢら聽くことに心せよ、汝らが量る量にて量られ、更に増し加へらるべし。』^(一一) 二九
 三〇 それ有てる人は、なほ與へられ、有たぬ人は、有てる物をも取らるべし』^(一二) 三一
 三二 三三 また言ひたまふ『神の國は、或人、たねを地に播くが如し、^(一三) 三四 日夜起臥するほどに、種はえ出でて育てど
 三五 三六 も、その故を知らず。』^(一四) 三七 地はおのづから實を結ぶものにして、^(一五) 三八 初には苗、つぎに穂、つひに穂の中に充ち足れる
 三九 四〇 穀なる。』^(一六) 四一 實、熟れば直ちに鎌を入る、收穫時の到れるなり』^(一七) 四二

イ一三一—二〇 太一三 二太一九・二二—二三 一六、一一・三三 又太一三・一二を見よ
 ・二八一—二三 路八・ 提前六・九、一〇、一 ト太一〇・二六 路八 ル二六—二九(太一三
 一—一—一五 七 二七、一二・二二 二四—三〇)
 ロ太四・一〇を見よ ホ約登二・一六、一七 チ太一・二五を見よ チ黙一四・一五を見よ
 ハ太一三・二三を見よ ヘ太五・二五 路八・ リ太七・二 路六・三八

三〇一—三二二 太一三 夕太一三・三四(約一) ソ可四・一、五・二、二 一、六・三・二、四五 八—三三四 路八・二 路八・二八 徒二六
 三二一—三三三 路一三 〇・六、一六・二五 一、三三三、四一 六—三三七 二七 來七・一 雅
 二八、一九 一三五—四一 太八・ (可三・九) 九—九 九
 太一三・二四を見よ 一八〇—三三二 七 七 伯三八・二一 詩八 十可四・一、五・二、二 二・一九
 三〇 徒一九・二〇 路八・二二—二五 九・九 賽四〇・一二 (可三・九) ウ太四・三を見よ

三〇 三〇 また言ひ給ふ『われら神の國を何になすらへ、如何なる譬をもて示さん。三一 一粒の芥種のごとし、地に播
 三二 三二 く時は、世にある萬の種よりも小けれど、三三 既に播きて生え出づれば、萬の野菜よりは大きく、かつ大なる枝を出
 三三 三三 して、空の鳥その蔭に棲み得るほどになるなり』

三三 三三 斯のごとき數多の譬をもて、人々の聽きうる力に隨ひて、御言を語り、三四 譬ならでは語り給はず、弟子た
 三六 三六 ちには、人なき時に凡ての事を釋き給へり。

三五 三五 その日、夕になりて言ひ給ふ『いざ彼方に往かん』三六 弟子たち群衆を離れ、イエスの舟にの給ふまま共に
 三八 三八 乗り出づ、他の舟も從ひゆく。三七 時に烈しき颶風おこり、浪うち込みて、舟に滿つるばかりなり。三八 イエスは艦
 三九 三九 の方に茵を枕として寝ねたまふ。弟子たち呼び起して言ふ『師よ、我らの亡ぶるを顧み給はぬか』三九 イエス起き

四〇 四〇 て風をいましめ、海に言ひたまふ『黙せ、鎮れ』乃ち風やみて、大なる風となりぬ。四〇 斯て弟子たちに言ひ給ふ
 四一 四一 『なに故かく臆するか、信仰なきは何ぞ』四一 かれら甚く懼れて互に言ふ『こは誰ぞ、風も海も順ふとは』

第五章

四三 四三 一 斯て海の彼方なるゲラセネ人の地に到る。ニイエスの舟より上り給ふとき、穢れし靈に憑かれた
 二一 二一 る人、墓より出でて、直ちに遇ふ。三 この人、墓を住處とす、鏈にてすら今は誰も繋ぎ得ず。四 彼

四五 四五 はしばしば足械と鏈とにて繋がれたれど、鏈をちぎり、足械をくだきたり、誰も之を制する力なかりしなり。
 六五 六五 夜も晝も、絶えず墓あるひは山にて叫び、己が身を石にて傷けるたり。六 かれ遙にイエスを見て、走りきた
 七 七 り、御前に平伏し、七 大聲に叫びて言ふ『いと高き神の子イエスよ、我は汝と何の關係あらん、神によりて願

九八 ふ、我を苦しめ給ふな』ハこれはイエス『穢れし靈よ、この人より出で往け』と言ひ給ひしに因るなり。九イエ
 〇 スまた『なんぢの名は何か』と問ひ給へば『わが名はレギオン、我ら多きが故なり』と答へ、一〇また己らを此の
 二一 地の外に逐ひやり給はざらんことを切に求む。二彼處の山邊に豚の大なる群、食しむたり。三惡鬼どもイエスに
 三三 求めて言ふ『われらを遣して豚に入らしめ給へ』三三イエス許したまふ。穢れし靈いでて、豚に入りたれば、二千
 三四 匹ばかりの群、海に向ひて、崖を駆けくだり、海に溺れたり。二四飼ふ者ども逃げ往きて、町にも里にも告げられ
 三五 ば、人々何事の起りしかを見んとて出づ。二五斯てイエスに來り、惡鬼に憑かれたりし者、即ちレギオンをもちた
 二六 りし者の、衣服をつけ、慥なる心にて坐しをるを見て、懼れあへり。二六かの惡鬼に憑かれたる者の上にあし事
 二七 と、豚の事を見し者ども、之を具に告げたれば、二七人々イエスにその境を去り給はん事を求む。二八イエス舟に
 二九 乗らんとし給ふとき、惡鬼に憑かれたりしもの偕に在らん事を願ひたれど、二九許さずして言ひ給ふ『なんぢの家
 三〇 に、親しき者に歸りて、主がいかに大なる事を汝に爲し、いかに汝を憫み給ひしかを告げよ』三〇彼ゆきてイエス
 三二 の如何に大なる事を己になし給ひしかをデカポリスに言ひ弘めたれば、人々みな怪しめり。
 三三 三イエス舟にて、復かなたに渡り給ひしに、大なる群衆みもとに集る、イエス海邊に在せり。三三會堂司の
 三三 一人、ヤイロといふ者きたり、イエスを見て、その足下に伏し、三三切に願ひて言ふ『わが稚なき娘、いまはの際
 三四 なり、來りて手をおき給へ、さらば救はれて活くべし』三四イエス彼と共にゆき給へば、大なる群衆したがひつつ
 御許に押迫る。

イ猶六 千人をレギオンと
 口路一・二〇 へ可五・九を見よ
 ハ可五・一五路八・三 二利一・七、八
 〇(大二六・五三) ホ太四・二四を見よ
 經馬の軍隊にて六 弗二・一一三
 ト(路八・二七) 三八・三九
 手路八・三五 西一・ル可五・一五を見よ
 一三 三可六・五三—五六は
 其結果ならん
 路八・ワ太四・二五を見よ
 カ二一 太九・一 路
 八・四〇 四一—五六
 一八・八、一七
 八二二、二五、一
 二二一、四三 太九・
 一八一、二六 路八・
 一八・八、一七
 三可六・五、七、三二、
 八二二、二五、一
 六・一八 路四・四
 〇、一三—一五、
 九・二七、二八、八
 來六・二(行六・六)

一五・一八、三〇 ム路五・一七を見よ ノ可三・一〇を見よ 九・二三、二四路八 三七 可九・二、一 一五路七・一四 約一一
 ・二二、一五 ウ大九・二二を見よ 可五・二九 五〇 徒一四・九、 四・三三 徒九・四〇
 ナ可三・一〇を見よ 井路七・五〇、八・四 可五・二二を見よ 一〇 羅四・一八一 ケ可五・二二を見よ (王上一七・二二) 王
 ラ可三・一〇を見よ 八 (徒一六・三六 夕路八・五〇 二二) フ撒前四・一三十一 下四・三五)
 可五・三四 雅二・一六 ヤ大九・二八、二九 可マ太一七・一、二六、コ約一・一一、一二、一三 大八・四を見よ

二五 爰に十二年、血漏を患ひたる女あり。二六 多くの醫者に多く苦しめられ、有てる物をことごとく費したれ
 二七 ど、何の効なく、反つて増々悪しくなりたり。二七 イエスの事をききて、群衆にまじり、後に來りて、御衣にさは
 二八 る、二八『その衣にだに觸らば救はれん』と自ら謂へり。二九 斯て血の泉、ただちに乾き、病のいえたるを身に覺えた
 三〇 り。三〇 イエス直ちに能力の己より出でたるを自ら知り、群衆の中にて、振反り言ひたまふ『誰が我の衣に觸りし
 三一 ぞ』三二 弟子たち言ふ『群衆の押迫るを見て、誰が我に觸りしぞと言ひ給ふか』三三 イエスこの事を爲しし者を見ん
 三三 とて見回し給ふ。三三 女おそれ戦き、己が身になりし事を知り、來りて御前に平伏し、ありしままを告ぐ。三四 イエ
 三四 ス言ひ給ふ『娘よ、なんぢの信仰なんぢを救へり、安らかに往け、病いえて健かになれ』
 三五 かく語り給ふほどに、會堂司の家より人々きたりて言ふ『なんぢの娘は早や死にたり、争でなほ師を煩は
 三六 すべき』三六 イエス其の告ぐる言を傍より聞きて、會堂司に言ひたまふ『懼るな、ただ信ぜよ』三七 斯てペテロ、ヤ
 三八 コブその兄弟ヨハネの他は、ともに往く事を誰にも許し給はず。三八 彼ら會堂司の家に来る。イエス多くの人の、
 三九 甚く泣きつ叫びつする騒を見、三九 入りて言ひ給ふ『なんぞ騒ぎ、かつ泣くか、幼兒は死にたるにあらず、寐ねた
 四〇 るなり』四〇 人々イエスを嘲笑ふ。イエス彼等をみな外に出し、幼兒の父と母と己に伴へる者とを牽きつれて、
 四一 幼兒のをる處に入り、四一 幼兒の手を執りて『タリタ、クミ』と言ひたまふ。少女よ、我なんぢに言ふ、起きよ、
 四二 との意なり。四二 直ちに少女たちて歩む、その歳十二なりければなり。彼ら直ちに甚く驚きおどろけり。四三 イエス
 四三 此の事を誰にも知れぬやうにせよと、堅く彼らを戒め、また食物を娘に與ふることを命じ給ふ。

第六章

一 斯て其處をいで、己が郷に到り給ひしに、弟子たちも從へり。ニ安息日になりて、會堂にて教へ

授けられたる智慧は何ぞ、その手にて爲す斯のごとき能力あるわざは何ぞ。三 此の人は木匠にして、マリヤの

子、またヤコブ、ヨセ、ユダ、シモンの兄弟ならずや、其の姉妹も此處に我らと共にをるに非ずや」遂に彼に蹟

けり。四 イエス彼らに言ひたまふ『預言者は、おのが郷、おのが親族、おのが家の外にて尊ばれざる事なし』

五 彼處にては、何の能力ある業をも行ひ給ふこと能はず、ただ少數の病める者に、手をおきて醫し給ひしのみ。

六 彼らの信仰なきを怪しみ給へり。

七 斯て村々を歴巡りて教へ給ふ。七 また十二弟子を召し、二人づつ遣しはじめ、穢れし靈を制する權威を與

へ、ハかつ旅のために、杖一つの他は、何をも持たず、糧も囊も帶の中に錢をも持たず、九 ただ草鞋ばかりをは

きて、二つの下衣をも著ざること命じ給へり。一〇 斯て言ひたまふ『何處にても人の家に入らば、その地を去る

まで其處に留れ。二 何地にても汝らを受けず、汝らに聽かずば、其處を出づるとき、證のために足の裏の塵を拂

へ』三 爰に弟子たち出で往きて、悔改むべきことを宣傳へ、四 多くの悪鬼を逐ひだし、多くの病める者に油を

ぬりて醫せり。

一四 斯てイエスの名顯れたれば、ヘロデ王ききて言ふ『バプテスマのヨハネ、死人の中より甦へりたり。この

故に此等の能力その中に働くなり』一五 或人は『エリヤなり』といひ、或人は『預言者、いにしへの預言者のごと

イ一六 太二三・五 ハ大四・二三を見よ ト雅一・一 加一・一九 ヲ可六・一を見よ ヨ七一— 太一〇・三— 一四、一六 路 五
四一五八 (可一〇・一) 子雅一 可五・二三を見よ 一、九一— 四 路九 九一— 一
口太一三・五四、五七 二太七・二八を見よ リ太一三・五六 カ太九・三五 路一三 一、三一— 五 路一〇・一
可六・四 路四・一 ホ太一三・五五 又太一一・六を見よ 二、二二— (可一・三九、 四一— 一) ソ太一〇・一〇
六、二三 へ太一二・四六を見よ ル太二三・五七を見よ 一〇・一) タ太一〇・一、五 可 ツ太一〇・一四 路九 ラ一四— 一六 太一四・
一、二 路九・七一— 九 ム太一四・二を見よ ウ來二・四 井太一六・一四を見よ
ノ太二一・一— 一を見よ

オ一七—二九 太一四 ケ(創四〇・二〇) 一四 路六・一三、ア可三・二〇 三二—三八 可八
 三—一二 フ路三・一 九・一〇、一七・五、サ三—四四 太一四 二—一九
 ク太一四・三を見よ コ(帖一・三、二・一八) 二二—一四、二四・ 二—三一—二 路九 キ可四・三六を見よ
 ヤ太一四・四を見よ エ帖五・三、六、七、二 一〇 徒一・二、二六 二〇—一七 約六
 マ(太二—二六) テ太一〇・二 可三 等 五—一三(太一五

二七 き者なり』といふ。二六 ヘロデ聞きて言ふ『わが首斬りしヨハネ、かれ甦へりたるなり』二七 ヘロデ先にその娶りたる己が兄弟ピリポの妻ヘロデヤの爲に、みづから人を遣し、ヨハネを捕へて獄に繋げり。一八ヨハネ、ヘロデに『その兄弟の妻を納るるは、宜しからず』と言へるに因る。一九ヘロデヤ、ヨハネを怨みて殺さんと思へど能はず。二〇それはヘロデ、ヨハネの義にして聖なる人たるを知りて、之を畏れ、之を護り、且その教をききて、大に悩みつつも、なほ喜びて聽きたる故なり。二一然るに機よき日來り。ヘロデ己が誕生日に大臣・將校・ガリラヤの貴人たちを招きて饗宴せしに、二三かのヘロデヤの娘いり來りて、舞をまひ、ヘロデと其の席に列れる者とを喜ばしむ。王、少女に言ふ『何にても欲しく思ふものを求めよ、我あたへん』二三 また誓ひて言ふ『なんぢ求めば、我が國の半までも與へん』二四 娘いでて母にいふ『何を求めべきか』母いふ『バプテスマのヨハネの首を』二五 娘ただちに急ぎて王の許に入りきたり、求めて言ふ『ねがはくは、バプテスマのヨハネの首を盆に載せて速かに賜はれ』二六 王いたく憂ひたれど、その誓と席に在る者とに對して拒むことを好まず、二七 直ちに衛兵を遣し、之にヨハネの首を持ち來ることを命ず。衛兵ゆきて獄にて、ヨハネを首斬り、二八その首を盆にのせ、持ち來りて少女に與ふ、少女これを母に與ふ。二九ヨハネの弟子たち聞きて來り、その屍體を取りて墓に納めたり。三〇使徒たちイエスの許に集りて、その爲ししこと、教へし事をことごとく告ぐ。三一イエス言ひ給ふ『なんぢら人を避け、寂しき處に、いざ來りて暫し息へ』これは往來の人おほくして、食する暇だになかりし故なり。三二斯て人を避け、舟にて寂しき處にゆく。三三其の往くを見て、多くの人それと知り、その處を指して、町々より

三四 徒歩にてともに走り、彼等よりも先に往けり。四五 イエス出でて、大なる群衆を見、その牧者なき羊の如くなる
 三五 を甚く憫みて、多くの事を教へはじめ給ふ。三五 時すでに晩くなりたれば、弟子たち御許に來りていふ「ことは寂
 三六 しき處、はや時も晩し。三六 人々を去らしめ、周圍の里また村に往きて、己がために食物を買はせ給へ」三七 答へて
 三九 言ひ給ふ「なんぢら食物を與へよ」弟子たち言ふ「われら往きて二百デナリのパンを買ひ、これに與へて食はず
 四〇 べきか」三八 イエス言ひ給ふ「パン幾つあるか、往きて見よ」彼ら見ていふ「五つ、また魚二つあり」三九 イエス凡
 四一 ての人の組々となりて、青草の上に坐することを命じ給へば、四〇 或は百人、あるひは五十人、畝のごとく列びて
 四二 坐す。四二 斯てイエス五つのパンと二つの魚とを取り、天を仰ぎて祝しパンをさき、弟子たちに付して人々の前に
 四三 置かしめ、二つの魚をも人毎に分け給ふ。四三 凡ての人、食ひて飽きたれば、四三 パンの餘、魚の殘を集めしに、十
 四四 二の筐に満ちたり。四四 パンを食ひたる男は五千人なりき。
 四五 四五 イエス直ちに、弟子たちを強ひて舟に乗らせ、自ら群衆を返す間に、彼方なるベツサイダに先に往かし
 四六 む。四六 群衆に別れてのち、祈らんとて山にゆき給ふ。四七 夕になりて、舟は海の真中にあり、イエスはひとり陸に
 四八 在す。四八 風逆ふに因りて、弟子たちの漕ぎ煩ふを見て、夜明の四時ごろ、海の上を歩み、その許に到りて、往き
 四九 過ぎんとし給ふ。四九 弟子たち其の海の上を歩み給ふを見、變化の者ならんと思ひて叫ぶ。五〇 皆これを見て心騒ぎ
 五〇 たるに因る。イエス直ちに彼らに語りて言ひ給ふ「心安かれ、我なり、懼るな」五一 斯て弟子たちの許にゆき、舟
 五二 に登り給へば、風やみたり。弟子たち心の中にて甚く驚く、五二 彼らは先のパンの事をさとらず、反つて其の心鈍

イ大九・三六を見よ
 口太九・三六を見よ
 ハ約六・七（民一一・一三、二二）
 ニ太一八・二八を見よ
 ホ太一四・一九を見よ
 ヘ王ト四・四三
 ト王下四・四四
 チ太一四・二〇を見よ
 リ太一四・二一
 ヌ太一一・二二を見よ
 ワ徒一八・一八、二一
 四四五—五一
 約六
 二二—三三
 約六
 一五—二二
 カ太一四・二三を見よ
 ヨ太一四・二五（可一・三三、三二）
 ツ可六・三二
 ネ詩一〇七・二九
 ナ可八・一七
 ラ（羅一一・七）
 タ伯九・八
 レ太九・二を見よ
 ソ太一四・二七を見よ

五三三—五六 太一四 ノ一—二三 太一五・
 三四—三六 (約六 一—二〇 〇・二九 默二—二
 ・二四、二五) オ太一五・一を見よ 七(太一五・二 路 マ太二三・二五を見よ テ出二〇・一二 利一 〇・九 申二七・一六
 一八、二七・六
 九三三 申五・一六 彼二〇・二〇、三〇
 太一九・一九 弗六 二七
 井可三・一〇を見よ 四、二八、一一・八 ヤ可七・五、八、九、一 フ可七・三を見よ 三 又加一・一四を コ可七・二を見よ
 一—三 二—三 利二 一八、二七・六
 サ例二八・二二 利一 二—四 太三三・

くなりしなり。

五三 遂に渡りてゲネサレの地に著き、舟がかりす。五四 舟より上りしに、人々ただちにイエスを認めて、五五 徧く
 五六 あたりを馳せまはり、その在すと聞く處々に、患ふ者を床のままつれ來る。五六 その到りたまふ處には、村にて
 も、町にても、里にても、病める者を市場におきて、御衣の總にだに觸らしめ給はんことを願ふ。觸りし者は、
 みな醫されたり。

第七章

一 パリサイ人と或る學者らとエルサレムより來りてイエスの許に集る。ニ 而して、その弟子たちの
 三 中に、潔からぬ手、即ち洗はぬ手にて食事する者のあるを見たり。三 パリサイ人および凡てのユダ
 四 ヤ人は、古への人の言傳を固く執りて、懇ろに手を洗はねば食はず。四 また市場より歸りては、まづ禱がざれば
 五 食はず。このほか酒杯・鉢・銅の器を濯ぐなど多くの傳を承けて固く執りたり。五 パリサイ人および學者らイエ
 六 スに問ふ「なにゆゑ汝の弟子たちは、古への人の言傳に遵ひて歩まず、潔からぬ手にて食事するか」六 イエス言
 七 ひ給ふ「イザヤは汝ら偽善者につきて能く預言せり、「この民は口唇にて我を敬ふ、然れど、その心は我に遠ざか
 八 七 る。七 ただ徒らに我を拜む、人の訓誡を教とし教へて」と録したり。八 汝らは神の誠命を離れて人の言傳を固く
 九 九 執る」九 また言ひたまふ「汝等はおのれの言傳を守らんとて、能くも神の誠命を棄つ。一〇 即ちモーセは「なんぢ
 一〇 二 の父、なんぢの母を敬へ」といひ「父また母を罵る者は、必ず殺さるべし」といへり。二 然るに汝らは「人もし
 三 父また母にむかひ我が汝に對して負ふ所のものは、コルバン即ち供物なりと言はば可し」と言ひて、三 そののち

一三 人をして、父また母に事ふること勿らしむ。一四 かく汝らの傳へたる言傳によりて、神の言を空しうし、又おほく
 一四 此の類の事をなしをるなり』一五 更に群衆を呼び寄せて言ひ給ふ『なんぢら皆われに聽きて悟れ。一六 外より人に入
 一六 入り給ひしに、弟子たち其の譬を問ふ。一七 彼らに言ひ給ふ『なんぢらも然か悟なきか、外より人に入る物の、人
 一七 入りを汚し得るものなし、然れど人より出づるものは、これ人を汚すなり』一八 イエス群衆を離れて家に
 一八 入り給ひしに、弟子たち其の譬を問ふ。一八 彼らに言ひ給ふ『なんぢらも然か悟なきか、外より人に入る物の、人
 一九 を汚しえぬを悟らぬか、一九 これ心には入らず、腹に入りて廁におつるなり』かく凡ての食物を潔しとし給へり。
 二〇 二〇 また言ひたまふ『人より出づるものは、これ人を汚すなり。二一 それ内より、人の心より、悪しき念いづ、即ち
 二一 淫行・竊盜・殺人、二二 姦淫・慳貪・邪曲・詭計・好色・嫉妬・誹謗・傲慢・愚痴。二三 すべて此等の悪しき事は内
 二二 より出でて人を汚すなり』
 二四 イエス起ちて此處を去り、ツロの地方に往き、家に入りて人に知られじと爲給ひたれど、隠るること能は
 二五 ざりき。二五 爰に穢れし靈に憑かれたる稚なき娘をもてる女、直ちにイエスの事をきき、來りて御足の許に平伏す。
 二六 この女はギリシヤ人にて、スロ・フエニキヤの生なり。その娘より悪鬼を逐ひ出し給はんことを請ふ。二七 イ
 二七 エス言ひ給ふ『まづ子供に飽かしむべし、子供のパンをとりて小狗に投げ與ふるは善からず』二八 女こたへて言ふ
 二九 『然り主よ、食卓の下の小狗も小供の食屑を食ふなり』二九 イエス言ひ給ふ『なんぢ此の言によりて「安んじ」
 三〇 往け、悪鬼は既に娘より出でたり』三〇 女、家に歸りて見るに、子は寢臺の上に臥し、悪鬼は既に出でたり。
 三一 イエス又ツロの地方を去りて、シドンを過ぎ、デカボリスの地方を経て、ガリラヤの海に來り給ふ。三二

一 提前五・八
 二 太一三・一九 路二 二 太一五・二五
 三 太一三・一九 路二 三 太一五・二五
 四 四五 西一・九 七
 五 太一五・二八 可二・ へ 羅一四・二一 二三を 見よ 西二・一六
 六 太一五・二八 可二・ へ 羅一四・二一 二三を 見よ 西二・一六
 七 太一五・二八 可二・ へ 羅一四・二一 二三を 見よ 西二・一六
 八 太一五・二八 可二・ へ 羅一四・二一 二三を 見よ 西二・一六
 九 太一五・二八 可二・ へ 羅一四・二一 二三を 見よ 西二・一六
 一〇 太一五・二八 可二・ へ 羅一四・二一 二三を 見よ 西二・一六
 一一 太一五・二八 可二・ へ 羅一四・二一 二三を 見よ 西二・一六
 一二 太一五・二八 可二・ へ 羅一四・二一 二三を 見よ 西二・一六
 一三 太一五・二八 可二・ へ 羅一四・二一 二三を 見よ 西二・一六
 一四 太一五・二八 可二・ へ 羅一四・二一 二三を 見よ 西二・一六
 一五 太一五・二八 可二・ へ 羅一四・二一 二三を 見よ 西二・一六
 一六 太一五・二八 可二・ へ 羅一四・二一 二三を 見よ 西二・一六
 一七 太一五・二八 可二・ へ 羅一四・二一 二三を 見よ 西二・一六
 一八 太一五・二八 可二・ へ 羅一四・二一 二三を 見よ 西二・一六
 一九 太一五・二八 可二・ へ 羅一四・二一 二三を 見よ 西二・一六
 二〇 太一五・二八 可二・ へ 羅一四・二一 二三を 見よ 西二・一六
 二一 太一五・二八 可二・ へ 羅一四・二一 二三を 見よ 西二・一六
 二二 太一五・二八 可二・ へ 羅一四・二一 二三を 見よ 西二・一六
 二三 太一五・二八 可二・ へ 羅一四・二一 二三を 見よ 西二・一六
 二四 太一五・二八 可二・ へ 羅一四・二一 二三を 見よ 西二・一六
 二五 太一五・二八 可二・ へ 羅一四・二一 二三を 見よ 西二・一六
 二六 太一五・二八 可二・ へ 羅一四・二一 二三を 見よ 西二・一六
 二七 太一五・二八 可二・ へ 羅一四・二一 二三を 見よ 西二・一六
 二八 太一五・二八 可二・ へ 羅一四・二一 二三を 見よ 西二・一六
 二九 太一五・二八 可二・ へ 羅一四・二一 二三を 見よ 西二・一六
 三〇 太一五・二八 可二・ へ 羅一四・二一 二三を 見よ 西二・一六
 三一 太一五・二八 可二・ へ 羅一四・二一 二三を 見よ 西二・一六
 三二 太一五・二八 可二・ へ 羅一四・二一 二三を 見よ 西二・一六

一 提前五・八
 二 太一三・一九 路二 二 太一五・二五
 三 太一三・一九 路二 三 太一五・二五
 四 四五 西一・九 七
 五 太一五・二八 可二・ へ 羅一四・二一 二三を 見よ 西二・一六
 六 太一五・二八 可二・ へ 羅一四・二一 二三を 見よ 西二・一六
 七 太一五・二八 可二・ へ 羅一四・二一 二三を 見よ 西二・一六
 八 太一五・二八 可二・ へ 羅一四・二一 二三を 見よ 西二・一六
 九 太一五・二八 可二・ へ 羅一四・二一 二三を 見よ 西二・一六
 一〇 太一五・二八 可二・ へ 羅一四・二一 二三を 見よ 西二・一六
 一一 太一五・二八 可二・ へ 羅一四・二一 二三を 見よ 西二・一六
 一二 太一五・二八 可二・ へ 羅一四・二一 二三を 見よ 西二・一六
 一三 太一五・二八 可二・ へ 羅一四・二一 二三を 見よ 西二・一六
 一四 太一五・二八 可二・ へ 羅一四・二一 二三を 見よ 西二・一六
 一五 太一五・二八 可二・ へ 羅一四・二一 二三を 見よ 西二・一六
 一六 太一五・二八 可二・ へ 羅一四・二一 二三を 見よ 西二・一六
 一七 太一五・二八 可二・ へ 羅一四・二一 二三を 見よ 西二・一六
 一八 太一五・二八 可二・ へ 羅一四・二一 二三を 見よ 西二・一六
 一九 太一五・二八 可二・ へ 羅一四・二一 二三を 見よ 西二・一六
 二〇 太一五・二八 可二・ へ 羅一四・二一 二三を 見よ 西二・一六
 二一 太一五・二八 可二・ へ 羅一四・二一 二三を 見よ 西二・一六
 二二 太一五・二八 可二・ へ 羅一四・二一 二三を 見よ 西二・一六
 二三 太一五・二八 可二・ へ 羅一四・二一 二三を 見よ 西二・一六
 二四 太一五・二八 可二・ へ 羅一四・二一 二三を 見よ 西二・一六
 二五 太一五・二八 可二・ へ 羅一四・二一 二三を 見よ 西二・一六
 二六 太一五・二八 可二・ へ 羅一四・二一 二三を 見よ 西二・一六
 二七 太一五・二八 可二・ へ 羅一四・二一 二三を 見よ 西二・一六
 二八 太一五・二八 可二・ へ 羅一四・二一 二三を 見よ 西二・一六
 二九 太一五・二八 可二・ へ 羅一四・二一 二三を 見よ 西二・一六
 三〇 太一五・二八 可二・ へ 羅一四・二一 二三を 見よ 西二・一六
 三一 太一五・二八 可二・ へ 羅一四・二一 二三を 見よ 西二・一六
 三二 太一五・二八 可二・ へ 羅一四・二一 二三を 見よ 西二・一六

ツ 太九・三二 路一一 ム 可六・四一 約一一 ノ 三三・五六
 一四 太八・四を見よ (可六・三四) 太一四・一九を見よ ア 太一五・三九
 木 可五・二三を見よ ウ 可八・二二 ク 可一・四五 (可六・三四) 哥前一〇・三〇、三三 サ 太一五・三九
 ナ 可八・二三 井 三三・五 太一一 ヤ 一・九 太一五・三三 ケ 可六・三六、三七 一 提前四・三三五 キ 一・二二 太一六
 ラ 可八・二三 約九・六 五 二一三九 (可六・三三) フ 太一四・一九 テ 太一五・三七を見よ ユ 約八・六

三 人々、耳聾にして物言ふこと難き者を連れ來りて、之に手をおき給はんことを願ふ。三三 イエス群衆の中より、
 四 彼をひとり連れ出し、その兩耳に指をさし入れ、また唾して其の舌に觸り、三四 天を仰ぎて嘆じ、その人に對ひて
 五 『エバタ』と言ひ給ふ、ひらけよとの意なり。三五 斯てその耳ひらけ、舌の縛ただちに解け、正しく物いへり。三六
 六 イエス誰にも告ぐなと人々を戒めたまふ。然れど戒むるほど反つて愈々言ひ弘めたり。三七 また甚だしく打驚きて
 七 言ふ『かれの爲しし事は皆よし、聾者をも聞えしめ、啞者をも物いはしむ』

第八章

一 一その頃また大なる群衆にて食ふべきものなかりしかば、イエス弟子たちを召して言ひ給ふ、二『わ
 二 れ此の群衆を憫む、既に三日われと偕にをりて食ふべき物なし。三 飢ゑしままにて、其の家に歸ら
 四 しめば、途にて疲れ果てん。其の中には遠くより來れる者あり』四 弟子たち答へて言ふ『この寂しき地にては、
 五 何處よりパンを得て、この人々を飽かしむべき』五 イエス問ひ給ふ『パン幾個あるか』答へて『七つ』といふ。

六 イエス群衆に命じて地に坐せしめ、七つのパンを取り、謝して之を裂き、弟子たちに與へて群衆の前におかし
 七 む。弟子たち乃ちその前におく。七 また小き魚すこしばかりあり、祝して之をも、その前におけと言ひ給ふ。

八 人々、食ひて飽き、撃きたる餘を拾ひしに、七つの籃に満ちたり。九 その人おほよそ四千人なりき。イエス彼
 一〇 らを歸し、一〇 直ちに弟子たちと共に舟に乗りて、ダルマヌタの地方に往き給へり。

一一 ニパリサイ人いで來りて、イエスと論じはじめ、之を試みて天よりの徴をもとむ。一二 イエス心に深く歎じて
 一三 言ひ給ふ『なにゆゑ今の代は徴を求むるか、誠に汝らに告ぐ、徴は今の代に斷えて與へられじ』一三 斯て彼らを離

れ、また舟に乗りて彼方に往き給ふ。

一四 弟子たちパンを携ふることを忘れ、舟には唯一つの他パンなかりき。一五 イエス彼らを戒めて言ひたまふ

一六 「慎みてパリサイ人のパンだねと、ヘロデのパンだねとに心せよ」一六 弟子たち互に、これはパン無き故ならんと

一七 語り合ふ。一七 イエス知りて言ひたまふ「何ぞパン無き故ならんと語り合ふか、未だ知らぬか、悟らぬか、汝らの

一八 心なほ鈍きか。一八 目ありて見ぬか、耳ありて聽かぬか。又なんぢら思ひ出でぬか、一九 五つのパンを擘きて、五千

二〇 人に與へし時、その餘を幾筐ひろひしか」弟子たち言ふ「十二」三〇「七つのパンを擘きて四千人に與へし時、その

二一 餘を幾籃ひろひしか」弟子たち言ふ「七つ」三一 イエス言ひたまふ「未だ悟らぬか」

二三 彼ら遂にベツサイダに到る。人々、盲人をイエスに連れ來りて、觸り給はんことを願ふ。三三 イエス盲人の

二四 手をとりて、村の外に連れ往き、その目に唾し、御手をあてて「なにか見ゆるか」と問ひ給へば、二四 見上げて言

二五 ふ「人を見る、それは樹の如き物の歩くが見ゆ」二五 また御手をその目にあて給へば、視凝めたるに、癒えて凡て

二六 のもの明かに見えたり。二六 斯て「村にも入るな」と言ひて、その家に歸し給へり。

二七 イエス其の弟子たちとピリポ・カイザリヤの村々に出でゆき、途にて弟子たちに問ひて言ひたまふ「人々

二八 は我を誰と言ふか」二八 答へて言ふ「バプテスマのヨハネ、或人はエリヤ、或人は預言者の一人」二九 また問ひ給ふ

三〇 「なんぢらは我を誰と言ふか」ペテロ答へて言ふ「なんぢはキリストなり」三〇 イエス己がことを誰にも告ぐなと

三一 彼らを戒め給ふ。三二 斯て人の子の必ず多くの苦難をうけ、長老・祭司長・學者らに棄てられ、かつ殺され、三日

イ太一六・五 二六
口太一三・三三を見よ 二六
太一五・一七 提 二六
後二・二六、一七 太一六・七
ハ太一四・一(太二二 へ可六・五二、八・二二
ト可一六・一四
リ太一四・二〇を見よ
又太一五・三四―三八
カ可三・一〇を見よ
ヨ(可七・三三)
ネ二七―二九 太一六
一三―一六 路九
一四を見よ
ウ太一六・一六を見よ
オ太一六・一一を見よ
ソ可八・二三
ツ(太八・四)
ナ太一六・二三
ラ太一四・二を見よ
ム馬四・五 太一六
一四を見よ
六・二二―二八 路
九・二二―二七
井太一六・二〇を見よ
ノ三一―九・一 太一

ク約一八・二〇(約一
 マ太四・二〇を見よ
 エ路九・二六(太一〇
 テ太八・二〇を見よ
 ム太二四・三〇、二五
 シ可五・三七を見よ
 三三
 〇・二四、一一・一
 ケ賽五五・八、九約五
 ・三三 路二・九
 ア太一六・二七を見よ
 ス(黙一・二七)
 四、一六・二五、二
 ・三〇
 羅一・二六 提後一
 サ黙一四・一〇
 ミ二一八 太一七・一
 ヒ太二三・七を見よ
 イ彼後一・一七、一八
 九)
 フ太一〇・三八を見よ
 八、二・二二 來
 キ(約三二・二八)
 一八 路九・二八
 モ詩八四・一〇
 口太三・二七を見よ
 ヤ(黙三・一九)
 コ太一〇・三九を見よ
 一一・二六
 ユ路九・二七
 三六
 セ太一七・四 路九
 八太一七・五を見よ

三三 の後に甦へるべき事を教へはじめ、
 三三 此の事をあらはに語り給ふ。爰にペテロ、イエスを傍にひきて戒め出でた
 三三 れば、
 三三 イエス振反りて弟子たちを見、ペテロを戒めて言ひ給ふ『サタンよ、わが後に退け、汝は神のことを思
 三三 はず、反つて人のことを思ふ』
 三四 斯て群衆を弟子たちと共に呼び寄せて言ひたまふ『人もし我に従ひ來らんと思
 三五 はば、己をすて、己が十字架を負ひて我に従へ。』
 三五 己が生命を救はんと思ふ者は、これを失ひ、我が爲また福音
 三六 の爲に己が生命をうしなふ者は、之を救はん。』
 三六 人、全世界を贏くとも、己が生命を損せば、何の益あらん、
 三七 人その生命の代に何を與へんや。』
 三八 不義なる、罪深き今の代にて、我または我が言を恥づる者をば、人の子も
 三九 また、父の榮光をもて、聖なる御使たちと共に來らん時に恥づべし』
 一 また言ひ給ふ『まことに汝らに告ぐ、此處に立つ者のうちに、神の國の、權能をもて來るを見る
 一 までは、死を味ははぬ者どもあり』

第九章

二 六日の後、イエスただペテロ、ヤコブ、ヨハネのみを率きつれ、人を避けて高き山に登りたまふ。斯て彼
 三 らの前にて其の狀かはり、
 三 其の衣かがやきて甚だ白くなりぬ、世の晒布者も爲し得ぬほど白し。』
 四 エリヤ、モ
 五 ーセともに彼らに現れて、イエスと語りぬたり。』
 五 ペテロ差出でてイエスに言ふ『ラビ、我らの此處に居るは善
 六 し。われら三つの廬を造り、一つを汝のため、一つをモーセのため、一つをエリヤのためにせん』
 六 彼等いたく
 七 懼れたれば、ペテロ何と言ふべきかを知らざりしなり。』
 七 斯て雲おこり、彼らを覆ふ。雲より聲出づ『これは我
 八 が愛しむ子なり、汝ら之に聽け』
 八 弟子たち急ぎ見回すに、イエスと己らとの他には、はや誰も見えざりき。

九 山をくだる時、イエス彼らに、人の子の、死人の中より甦へるまでは、見しことを誰にも語るなと戒め給ふ。

二〇 彼ら此の言を心にとめ『死人の中より甦へる』とは、如何なる事ぞと互に論じ合ふ。二 斯てイエスに問ひて言

三 夫『學者たちは、何故エリヤまづ來るべしと言ふか』三 イエス言ひ給ふ『實にエリヤ先づ來りて、萬の事をあら

三 たむ。然らば人の子につき、多くの苦難を受け、かつ蔑せらるる事の録されたるは何ぞや。三 されど我なんぢら

に告ぐ、エリヤは既に來れり。然るに彼に就きて録されたる如く、人々心のままに之を待へり』

二四 相共に弟子たちの許に來りて、大なる群衆の之を環り、學者たちの之と論じむたるを見給ふ。二五 群衆みな

一六 イエスを見るや否や、いたく驚き、御許に走り往きて禮をなせり。一六 イエス問ひ給ふ『なんぢら何を彼らと論ず

るか』一七 群衆のうち一人こたふ『師よ、啞の靈に憑かれたる我が子を御許に連れ來れり。一八 靈いづこにても彼

に憑けば、痙攣け泡をふき、齒をくひしぱり、而して瘦せ衰ふ。御弟子たちに之を逐ひ出すことを請ひたれど能

はざりき』一九 爰に彼らに言ひ給ふ『ああ信なき代なるかな、我いつまで汝らと憐にをらん、何時まで汝らを忍ば

ん。その子を我が許に連れきたれ』二〇 乃ち連れきたる。彼イエスを見しとき、靈ただちに之を痙攣けたれば、地

に倒れ、泡をふきて轉び廻る。二一 イエスその父に問ひ給ふ『いつの頃より斯くなりしか』父いふ『をさなき時よ

りなり。二三 靈しばしば彼を火のなか水の中に投げ入れて亡さんとせり。然れど汝なにか爲し得ば、我らを憫みて

助け給へ』二三 イエス言ひたまふ『爲し得ばと言ふか、信する者には、凡ての事なし得らるるなり』二四 その子の父

ただちに叫びて言ふ『われ信ず、信仰なき我を助け給へ』二五 イエス群衆の走り集るを見て、穢れし靈を禁めて言

九一—一三 太一七。 路一・二六、一七。 七。 三七一—四二。 太七六を見よ。 ヨ(太九・二八、二九、

九一—一三 太一七。 路一・二六、一七。 七。 三七一—四二。 太七六を見よ。 ヨ(太九・二八、二九、

九一—一三 太一七。 路一・二六、一七。 七。 三七一—四二。 太七六を見よ。 ヨ(太九・二八、二九、

レ可七・一七 (可二) 二二、二三 路九・ラ可三・一九 七・二四 一八・一 五〇〇
 一) 四三・四四 五 路二・五〇、九・四 一五 路九・四六一 才太二〇・二六を見よ 九) マ(民二一・二七一)二
 ツ太一七・一九 ナ可八・三一、九・二 五、一八・三四 約 四八 太一〇・四〇を見よ ケ哥前二・二三
 ツ太六・一八 二 太一六・二二を 一二・二六) 井(可三・二〇) ヤ三八・四〇 路九・フ太二二・三〇を見よ
 ネ三〇・三二 太一七 見よ ウ三三・三七 太(一) ノ路二二・二四(可九) 四九、五〇 コ太一〇・四二

三六 ひたまふ『啞にて耳聾なる靈よ、我なんぢに命ず、この子より出でよ、重ねて入るな』^{二六} 靈さけびて甚だしく

三七 瘞擻けさせて出でしに、その子、死人の如くなりたれば、多くの者これを死にたりと言ふ。三七 イエスその手を執

三八 りて起し給へば立てり。三八 イエス家に入り給ひしとき、弟子たち竊に問ふ『我等いかなれば逐ひ出し得ざりし

三九 か』^{三九} 答へ給ふ『この類は祈に由らざれば、如何にすとも出でざるなり』

三〇 此處を去りて、ガリラヤを過ぐ。イエス人の此の事を知るを欲し給はず。三三 これは弟子たちに教をなし、

かつ『人の子は人々の手にわたされ、人々これを殺し、殺されて、三日のち甦へるべし』^{三三} と言ひ給ふが故な

三三 弟子たちは、その言を悟らず、また問ふ事を恐れたり。

三四 斯てカペナウムに到る。イエス家に入りて、弟子たちに問ひ給ふ『なんぢら途すがら何を論ぜしか』^{三四}

三五 弟子たち默然たり、これは途すがら、誰か大ならんと、互に争ひたるに因る。三五 イエス坐して、十二弟子を呼び、

之に言ひたまふ『人もし頭たらんと思はば、凡ての人の後となり、凡ての人の役者となるべし』^{三六} 斯てイエス

三六 幼児をとりて、彼らの中におき、之を抱きて言ひ給ふ、^{三七} おほよそ我が名のために斯る幼児の一人を受くる者は、

我を受くるなり。我を受くる者は、我を受くるにあらず、我を遣しし者を受くるなり』

三八 ヨハネ言ふ『師よ、我らに従はぬ者の、御名によりて悪鬼を逐ひ出すを見しが、我らに従はぬ故に、之を

止めたり』^{三九} イエス言ひたまふ『止むな、我が名のために能力ある業をおこなひ、俄に我を譏り得る者なし。

四〇 我らに逆はぬ者は、我らに附く者なり。四一 キリストの者たるによりて、汝らに一杯の水を飲まする者は、我ま

四二 ことに汝らに告ぐ、必ずその報を失はざるべし。四三 また我を信ずる此のちひさきもの一人をつまずかする者は、寧ろ大なるひきうす礮臼を頸に懸けられて、海に投げ入れられんかた勝れり。四四 もし汝の手なんぢをつまずかせば、之を切り去れ、不具にて生命に入るは、兩手ありて、ゲヘナの消えぬ火に往くよりも勝るなり。四五 もし汝の足なんぢをつまずかせば、之を切り去れ、蹇跛にて生命に入るは、兩足ありてゲヘナに投げ入れらるるよりも勝るなり。四六 もし汝の眼なんぢをつまずかせば、之を抜き出だせ、片眼にて神の國に入るは、兩眼ありてゲヘナに投げ入れらるるよりも勝るなり。四七 彼處にては、その蛆つきず、火も消えぬなり。四八 それ人は、みな火をもてしほつけらるるべし。四九 鹽は善きものなり、然れど鹽もし其の鹽氣を失はば、何をなもて之に味つけん。汝ら心の中に鹽を保ち、かつ互に和くべし。』

第一章

一 イエス此處をたちて、ユダヤの地方およびヨルダンの彼方かたに來り給ひしに、群衆ぐんじゆうも御許に集あひたれば、常のごとく教へ給ふ。二 時にパリサイ人びとら來り試みて問ふ、「人その妻を出すはよきか」三 答へて言ひ給ふ、「モーセは汝らに何と命ぜしか」四 彼ら言ふ、「モーセは離縁狀を書きて出すことを許せり」五 イエス言ひ給ふ、「なんぢらの心、無情によりて、此の誠命まことのみことを録ししなり。六 然れど開關ひらきの初より一人を男と女おんなとに造り給へり」七 「斯る故に人はその父母を離れて、八 二人のもの一體となるべし」然ればはや二人にはあらず、一體なり。九 この故に神の合はせ給ふものは、人これを離すべからず。一〇 家に入りて弟子たち復この事を問ふ。一一 イエス言ひ給ふ、「おほよそ其の妻を出して、他に娶る者は、その妻に對して姦淫を行ふなり。一二 また妻も

イ太一八・六 路一七 二太五・二二を見よ 二太五・二三 路一四 一撒前五・二三 六・三四、一二、レ太一九・八 五・非五・三〇
 ・二(哥前八・一二) ホ太三・一二、二五・チ察六六・二四 一三三 一四・四九 ソ可一三・一九 彼後 ナ大五・三二を見よ
 口太一七・二七を見よ 四一を見よ 一三三 一四・四九 ソ可一三・一九 彼後 ナ大五・三二を見よ
 ハ太五・三〇、一八、ヘ太五・二九、一八、 四一を見よ 一三三 一四・四九 ソ可一三・一九 彼後 ナ大五・三二を見よ
 八 九 又(利二・二三) 二二・一八 哥後一三 三、四、二、六、二、タ申二四・一三 三 創二・二四 但一九 一三三

ム一三一・一六 太一九 一四 路一八・二七 一八(徒二〇・三二) 申五・二六―二〇 三・五
 ・二三一・一五 路一 (野前一四・二〇) 彼 八・一八―三〇 弗一・一八 彼前一 フ太一九・二〇 エ太六・二〇 ユ創一八・一四 耶三
 八・二五―一七 前二・二二) ク可一・四〇を見よ (四) 〇・一七、二二・六 ア可一・二七を見よ 二・一七、二七 路
 ウ大五・三を見よ ノ可九・三六 ヤ太二五・三四を見よ マ羅一三九 〇・一七、二二・六 ア可一・二七を見よ 一・三七
 井太一八・三、一九 オ一七―三二 太一九 路一〇・二五、一八 ケ出二〇・二二―一六 一約一・四二(可) サ太一九・二四 一・三七

し其の夫を棄てて他に嫁がば、姦淫を行ふなり』

一四三 一三 イエスの觸り給はんことを望みて、人々幼兒らを連れ來りしに、弟子たち禁められたれば、一四 イエス之を見、

一五 いきどほりて言ひたまふ『幼兒らの我に來るを許せ、止むな、神の國は斯のごとき者の國なり。一五 誠に汝らに告

一六 ぐ、凡そ幼兒の如くに神の國をうくる者ならずば、之に入ること能はず』一六 斯て幼兒を抱き、手をその上におき

て祝し給へり。

一七 一七 イエス途に出で給ひしに、一人はしり來り跪ぎて問ふ『善き師よ、永遠の生命を嗣ぐためには、我なに

一八 を爲すべきか』一八 イエス言ひ給ふ『なにゆる我を善しと言ふか、神ひとりの他に善き者なし。一九 誠命は汝が知る

一八 ところなり「殺すなかれ」「姦淫するなかれ」「盗むなかれ」「偽證を立つるなかれ」欺き取るなかれ「汝の父と

二〇 母とを敬へ』二〇 彼いふ『師よ、われ幼き時より皆これを守れり』二一 イエス彼に目をとめ、愛しみて言ひ給ふ『な

二〇 んぢ尙ほ一つを缺く、往きて汝の有てる物を、ことごとく賣りて、貧しき者に施せ、さらば財寶を天に得ん。且

二一 きたりて我に従へ』二三 この言によりて、彼は憂を催し、悲しみつつ去りぬ、大なる資産をもてる故なり。

二二 二三 イエス見回して弟子たちに言ひたまふ『富ある者の神の國に入るは如何に難いかな』二四 弟子たち此の御言

二五 に驚く。イエスまた答へて言ひ給ふ『子たちよ、神の國に入るは、如何に難いかな、二五 富める者の神の國に入る

二六 よりは、駱駝の針の孔を通るかた、反つて易し』二六 弟子たち甚く驚きて互に言ふ『さらば誰か救はるる事を得

二七 ん』二七 イエス彼らに目を注めて言ひたまふ『人には能はねど、神には然らず、夫れ神は凡ての事をなし得るな

二八 』ペテロ、イエスに對ひて『我らは一切をすて汝に従ひたり』と言ひ出でたれば、二九 イエス言ひ給ふ、『まことに汝らに告ぐ、我がため、福音のために、或は家、或は兄弟、あるひは姉妹、或は父、或は母、或は子、或は田畑をすつる者は、三〇 誰にても今、今の時に百倍を受けぬはなし。即ち家・兄弟・姉妹・母・子・田畑を迫害と共に受け、また後の世にては、永遠の生命を受けぬはなし。三二 然れど多くの先なる者は後に、後なる者は先になるべし』

三三 エルサレムに上る途にて、イエス先だち往き給ひしかば、弟子たち驚き、隨ひ往く者ども懼れたり。イエス再び十二弟子を近づけて、己が身に起らんとする事どもを語り出で給ふ、三三 『視よ、我らエルサレムに上る。人の子は祭司長・學者らに付されん。彼ら死に定めて、異邦人に付さん。三四 異邦人は嘲弄し、睡し、鞭ち、遂に殺さん、斯て彼は三日の後に甦へるべし』

三五 爰にゼベダイの子ヤコブ、ヨハネ御許に來りて言ふ『師よ、願くは我らが何にても求むる所を爲したまへ』三六 イエス言ひ給ふ『わが汝らに何を爲さんことを望むか』三七 彼ら言ふ『なんぢの榮光の中にて、一人をその右に、一人をその左に坐せしめ給へ』三八 イエス言ひ給ふ『なんぢらは求むる所を知らず、汝等わが飲む酒杯を飲み、我が受くるバプテスマを受け得るか』三九 彼等いふ『得るなり』イエス言ひ給ふ『なんぢら我が飲む酒杯を飲み、また我が受くるバプテスマを受くべし。四〇 然れど我が右左に坐することは、我の與ふべきものならず、ただ備へられたる人こそ與へらるるなれ』四一 十人の弟子これを聞き、ヤコブとヨハネとの事により憤ほり出でたれ

イ太四・二〇—二二 ハ(提前四・八) ト三三—三四 太二〇 又可八・三一、九・一 (太一六・二—可九 力路一八・四—
 (群三・八) ニ(代下二五・九 群四 二七—二九 路一 二、三一 路九・二二 三三) ヨ(太一九・二八) 太二〇・二三を見よ
 口太一九・二九 路一 七) ハ三三—三三 太二六・六七、二七 三三—四五 太二〇 二(約一八・三六) ナ(太二三・一一)
 八・二九、三〇 (太 太二二・三三を見よ 子可一・二七を見よ 三三〇 可一四・六 二〇—二八 レ太二〇・二二を見よ
 六・三三) へ太一九・三〇を見よ 路一八・三一 五、一五・一九 徒二二・二二 ソ路二二・五〇

ラ四二一四五(路二二) ウ太二〇・二七を見よ 賽五三・一二 哥後 ヤ(路一八・三五、一) 八・一 二二・七
二五・二七) 哥前九・一九一三三 五・二一 加三・一三 九・一 二 可一〇・四七 九・二二を見よ
ム太二〇・二六を見よ 井太二〇・二八を見よ ク四六―五二 太二〇 マ可一・二四を見よ エ太九・二を見よ 九・一〇 太二一
(可九・三五 路九) ノ太二〇・二八を見よ 二九―三四 路一 ケ太九・二七を見よ テ約一・二八 一―九 路一九・二
オ太二〇・二八を見よ 八・三五―四三 フ耶二九・一三 路一 ア約二〇・一六 (太 九―三八

二 ば、四二 イエス彼らと呼ばひて言ひたまふ「異邦人の君と認めらるる者の、その民を宰どり、大なる者の、民の上に

権を執ることは、汝らの知る所なり。四三 然れど汝らの中にては然らず、反つて大ならんと思ふ者は、汝らの役者

となり、四四 頭たらんと思ふ者は、凡ての者の僕となるべし。四五 人の子の來れるも、事へらるる爲にあらず、反つ

て事ふることをなし、又おほくの人の贖償として己が生命を與へん爲なり」

四六 斯て彼らエリコに到る。イエスその弟子たち及び大なる群衆と共に、エリコを出でたまふ時、テマイの子

バルテマイといふ盲目の乞食、路の傍に坐しをりしが、四七 ナザレのイエスなりと聞き、叫び出して言ふ「ダビデ

の子イエスよ、我を憫みたまへ」四八 多くの人かれを禁めて黙さしめんとしたれど、増々叫びて「ダビデの子よ、

我を憫みたまへ」と言ふ。四九 イエス立ち止りて「かれを呼べ」と言ひ給へば、人々盲人を呼びて言ふ「心安か

れ、起て、なんぢを呼びたまふ」五〇 盲人うはぎを脱ぎ捨て、躍り上りて、イエスの許に來りしに、五一 イエス答へ

て言ひ給ふ「わが汝に何を爲さんことを望むか」盲人いふ「わが師よ、見えんことなり」五二 イエス彼に「ゆけ、

汝の信仰なんぢを救へり」と言ひ給へば、直ちに見ることを得、イエスに従ひて途を往けり。

第一章

一 彼らエルサレムに近づき、オリブ山の麓なるベテパゲ及びベタニヤに到りし時、イエス二人の弟

子に遣さんとして言ひ給ふ、「むかひの村にゆけ、其處に入らば、頓て人の未だ乗りたることなき

驢馬の子の繋ぎあるを見ん、それを解きて牽き來れ。三 誰かもし汝らに「なにゆゑ然するか」と言はば「主の用

なり、彼ただちに返さん」といへ」四 弟子たち往きて、門の外に驢馬の子の繋ぎあるを見て解きたれば、

五 其處に立つ人々のうちの或者「なんぢら驢馬の子を解きて何とするか」と言ふ。六 弟子たちイエスの告げ給ひし如く言ひしに、彼ら許せり。七 斯て弟子たち驢馬の子をイエスの許に牽ききたり、己が衣をその上に置きたれば、イエス之に乗り給ふ。八 多くの人は己が衣を、或人は野より伐り取りたる樹の枝を途に敷く。九 かつ前に往き後に従ふ者ども呼はりて言ふ、「ホサナ、讚むべきかな、主の御名によりて来る者」一〇 讚むべきかな、今し來る我らの父ダビデの國、「いと高き處にてホサナ」一 遂にエルサレムに到りて宮に入り、凡ての物を見回し、時はや暮に及びたれば、十二弟子と共にベタニヤに出で往きたまふ。

二三 三 あくる日かれらベタニヤより出で來りし時、イエス飢ゑ給ふ。二三 遙に葉ある無花果の樹を見て、果をや得んと其のもとに到り給ひしに、葉のほか何をも見出し給はず、是は無花果の時ならぬに因る。一四 イエスその樹に對ひて言ひたまふ「今より後いつまでも、人なんぢの果を食はざれ」弟子たち之を聞けり。

一五 三 彼らエルサレムに到る。イエス宮に入り、その内にて賣買する者どもを逐ひ出し、兩替する者の臺、鴿を賣るものの腰掛を倒し、一六 また器物を持ちて宮の内を過ぐることを免し給はず。一七 かつ教へて言ひ給ふ「わが家は、もろもろの國人の祈の家と稱へらるべし」と録されたるにあらずや、然るに汝らは之を「強盜の巢」となせり」一八 祭司長・學者ら之を聞き、如何にしてかイエスを亡さんと謀る、それは群衆みな其の教に驚きたれば、彼を懼れしなり。

一九 一 夕になる毎に、イエス弟子たちと共に都を出でゆき給ふ。

イ七一〇 約一二・二一九
 一七一五 ホ九・七
 一七九九 一四八・一
 一八二二 二二二
 一八二六 太 二二・二七
 一八二七 太 二二・二七
 一八二八 太 二二・二七
 一八二九 太 二二・二七
 一八三〇 太 二二・二七
 一八三一 太 二二・二七
 一八三二 太 二二・二七
 一八三三 太 二二・二七
 一八三四 太 二二・二七
 一八三五 太 二二・二七
 一八三六 太 二二・二七
 一八三七 太 二二・二七
 一八三八 太 二二・二七
 一八三九 太 二二・二七
 一八四〇 太 二二・二七
 一八四一 太 二二・二七
 一八四二 太 二二・二七
 一八四三 太 二二・二七
 一八四四 太 二二・二七
 一八四五 太 二二・二七
 一八四六 太 二二・二七
 一八四七 太 二二・二七
 一八四八 太 二二・二七
 一八四九 太 二二・二七
 一八五〇 太 二二・二七
 一八五一 太 二二・二七
 一八五二 太 二二・二七
 一八五三 太 二二・二七
 一八五四 太 二二・二七
 一八五五 太 二二・二七
 一八五六 太 二二・二七
 一八五七 太 二二・二七
 一八五八 太 二二・二七
 一八五九 太 二二・二七
 一八六〇 太 二二・二七
 一八六一 太 二二・二七
 一八六二 太 二二・二七
 一八六三 太 二二・二七
 一八六四 太 二二・二七
 一八六五 太 二二・二七
 一八六六 太 二二・二七
 一八六七 太 二二・二七
 一八六八 太 二二・二七
 一八六九 太 二二・二七
 一八七〇 太 二二・二七
 一八七一 太 二二・二七
 一八七二 太 二二・二七
 一八七三 太 二二・二七
 一八七四 太 二二・二七
 一八七五 太 二二・二七
 一八七六 太 二二・二七
 一八七七 太 二二・二七
 一八七八 太 二二・二七
 一八七九 太 二二・二七
 一八八〇 太 二二・二七
 一八八一 太 二二・二七
 一八八二 太 二二・二七
 一八八三 太 二二・二七
 一八八四 太 二二・二七
 一八八五 太 二二・二七
 一八八六 太 二二・二七
 一八八七 太 二二・二七
 一八八八 太 二二・二七
 一八八九 太 二二・二七
 一八九〇 太 二二・二七
 一八九一 太 二二・二七
 一八九二 太 二二・二七
 一八九三 太 二二・二七
 一八九四 太 二二・二七
 一八九五 太 二二・二七
 一八九六 太 二二・二七
 一八九七 太 二二・二七
 一八九八 太 二二・二七
 一八九九 太 二二・二七
 一九〇〇 太 二二・二七

ソ二〇一四可一
 ・二二一四を見よ ナ雅一・六
 太二一・一九一二二 ラ太七・七、八を見よ
 ツ太二三・七を見よ ム太六・五を見よ
 ネ太一七・二〇、二一 ウ太六・一四弗四・三
 二 西三・一三 約 〇・一八
 登一・九 (太一八) ノ民一六・三
 三(四)三五 五路二〇・六(太
 井二七・三三 太二一 ヤ一・二二 太二一
 ・三三二七 路二 三・五、六 可六・二 三三十四六路二〇
 〇(一) ク(可三)二三、四・マ察五・七
 九一・九 ケ察五・二

二〇 彼ら朝早く路をすぎしに、無花果の樹の根より枯れたるを見る。二一 ペテロ思ひ出して、イエスに言ふ「ラ

二二 見給へ、詛ひ給ひし無花果の樹は枯れたり」三三 イエス答へて言ひ給ふ「神を信ぜよ。三三 誠に汝らに告ぐ、人も

三四 し此の山に「移りて海に入れ」と言ふとも、其の言ふところ必ず成るべしと信じて、心に疑はずば、その如く成

三五 るべし。三四 この故に汝らに告ぐ、凡て祈りて願ふ事は、すでに得たりと信ぜよ、然らば得べし。三五 また立ちて祈

三六 るとき、人を怨むる事あらば免せ、これは天に在す汝らの父の、汝らの過失を免し給はん爲なり」^(ナ)

三七 三六 かれら又エルサレムに到る。イエス宮の内を歩み給ふとき、祭司長・學者・長老たち御許に來りて、三八

三九 「何の權威をもて此等の事をなすか、誰が此等の事を爲すべき權威を授けしか」と言ふ。三九 イエス言ひ給ふ「わ

四〇 れ一言、なんぢらに問はん、答へよ、然らば我も何の權威をもて、此等の事を爲すかを告げん。四〇 ヨハネのバプ

四一 テスマは、天よりか、人よりか、我に答へよ」三三 彼ら互に論じて言ふ「もし天よりと言はば「何故かれを信ぜざ

四二 りし」と言はん。三三 然れど人よりと言はんか……」彼ら群衆を恐れたり、人みなヨハネを實に預言者と認められ

四三 ばなり。三三 遂にイエスに答へて「知らず」と言ふ。イエス言ひ給ふ「われも何の權威をもて此等の事を爲すか、

汝らに告げじ」

第二章

一 イエス譬をもて彼らに語り出で給ふ「ある人、葡萄園を造り、籬を環らし、酒槽の穴を掘り、櫓
 をたて、農夫どもに貸して、遠く旅立せり。二 時いたりて農夫より葡萄園の所得を受取らんとて、
 僕をその許に遣ししに、三 彼ら之を執へて打ちたたき、空手にて歸らしめたり。四 又ほかの僕を遣ししに、その

首に傷つけ、かつ辱しめたり。五また他の者を遣ししに、之を殺したり。又ほかの多くの僕をも、或は打ち或は殺したり。六なほ一人あり、即ち其の愛しむ子なり「わが子は敬ふならん」と言ひて、最後に之を遣ししに、七かの農夫ども互に言ふ「これは世嗣なり、いざ之を殺さん、然らばその嗣業は、我らのものとなるべし」八乃ち執へて之を殺し、葡萄園の外に投げ棄てたり。九然らば葡萄園の主、なにを爲さんか、來りて農夫どもを亡ぼし、葡萄園を他の者どもに與ふべし。一〇汝ら聖書に「造家者らの棄てたる石は、これぞ隅の首石となれる。一一これ主によりて成れるにて、我らの目には奇しきなり」とある句をすら讀まぬか」一二ここに彼等イエスを執へんと思ひたれど、群衆を恐れたり、この譬の己らを指して言ひ給へるを悟りしに因る。遂にイエスを離れて去り往けり。

一三かくて彼らイエスの言尾をとらへて陥入れん爲に、パリサイ人とヘロデ黨との中より、數人を御許に遣す。一四その者ども來りて言ふ「師よ、我らは知る、汝は眞にして、誰をも憚りたまふ事なし、人の外貌を見ず、眞をもて神の道を教へ給へばなり。我ら貢をカイザルに納むるは、宜きか、惡しきか、納めんか、納めざらんか」一五イエス其の詐偽なるを知りて「なんぞ我を試むるか、デナリを持ち來りて我に見せよ」と言ひ給へば、一六彼ら持ち來る。イエス言ひ給ふ「これは誰の像、たれの號なるか」一七カイザルのなり」と答ふ。一七イエス言ひ給ふ「カイザルの物はカイザルに、神の物は神に納めよ」一八彼らイエスに就きて甚だ怪しめり。一八また復活なしと云ふサドカイ人ら、イエスに來り問ひて言ふ、一九師よ、モーセは、人の兄弟もし子なく妻

イ來一・三二一三九 三
 口來一・二二二 三
 八彼一・二四一三一 一・二八路二〇・一
 賽五・五七七 九 約七・一、三〇、
 二 露一・一八・二二、二 四四
 へ太二二・二二 三
 ト一三一・一七 太二二
 二五・一二 路二
 〇・二六
 チ路一・一五 四
 太二二・一六を見よ 三・七
 又(路二二・二) 三
 ル太一八・二八を見よ 八一・一〇
 太二二・二一を見よ 太一〇・二六 西四
 太一七・二五 羅一 六
 ヨ一八・二七 太二二
 二二・一三三 路二
 〇・二七・一三八
 夕徒二三・八
 レ申二五・五
 ソ創三八・八 得一
 一・一一・一三
 ツ創一八・一四 路三
 二二
 ネ約五・二八 哥前六
 二四

ナ哥前二五・四二一 四 路二 二〇・三九、四〇) ヤ申六・五、一〇・一 ケ(太七・二二) エ母前二五・二二 何 ア三五―三七 太二三
 四、四九、五二 〇・三八 ノ路二〇・三九 (太 二、一一・一三 フ可一二・二九 六・六 米六・六一八 四一―四六 路二
 路二〇・三七 井二八―三四 太二三 二二・三四) マ利一九・一八 羅一 コ申四・三五、三九 太九・一三、一二 〇・四一―四四 二八、八・二、二〇、
 ム出三・六 徒七・三三 三四―四〇 (路 オ申六・四 三・九 加五・一四 四五・五、六、一四、 七 サ太二六・五五 可一 一八・二〇(可一〇
 來一・一六 一〇・二五―二八、 ク(雅二・一九) 雅二・八 二一、四六・九 七 太二三・四六を見よ 四・四九 路一九・四 一八・二〇(可一〇

二〇 を遺して死なば、その兄弟、かれの妻を娶りて、兄弟のために嗣子を擧ぐべしと、我らに書き遺したり。二〇 爰に
 二 七人の兄弟ありて、兄、妻を娶り、嗣子なくして死に、二 第二の者その女を娶り、また嗣子なくして死に、第三の
 三三 者もまた然なし、三三 七人とも嗣子なくして死に、終には其の女も死にたり。三三 復活のとき彼らみな甦へらん、
 二四 この女は誰の妻たるべきか、七人これを妻としたればなり」三四 イエス言ひ給ふ「なんぢらの誤れるは、聖書を
 二五 も、神の能力をも、知らぬ故ならずや。二五 人、死人の中より甦へる時は、娶らず、嫁がず、天に在る御使たちの
 二六 如くなるなり。二六 死にたる者の甦へる事に就きては、モーセの書の中なる柴の條に、神モーセに「われはアブラ
 二七 ハムの神、イサクの神、ヤコブの神なり」と告げ給ひし事あるを、未だ讀まぬか。二七 神は死にたる者の神にあら
 ず、生ける者の神なり。なんぢら大に誤れり」

二八 學者の一人、かれらの論じをを聞き、イエスの善く答へ給へるを知り、進み出でて問ふ「すべての誠命
 二九 のうち、何か第一なる」二九 イエス答へたまふ「第一は是なり」イスラエルよ聽け、主なる我らの神は唯一の主な
 三〇 り。三〇 なんぢ心を盡し、精神を盡し、思を盡し、力を盡して、主なる汝の神を愛すべし」三一 第二は是なり「おの
 三二 れの如く汝の隣を愛すべし」此の二つより大なる誠命はなし」三三 學者いふ「善きかな師よ」神は唯一にして他に
 三三 神なし」と言ひ給へるは眞なり。三三「ここを盡し、智慧を盡し、力を盡して神を愛し、また己のごとく隣を愛す
 三四 る」は、もろもろの燔祭および犠牲に勝るなり」三四 イエスその聰く答へしを見て言ひ給ふ「なんぢ神の國に遠か
 三五 らず」此の後たれも敢てイエスに問ふ者なかりき。三五 イエス宮にて教ふるとき、答へて言ひ給ふ「なにゆる學者

三六 らはキリストをダビデの子と言ふか。三六ダビデ聖靈に感じて自らいへり「主わが主に言ひ給ふ、我なんぢの敵を
三七 汝の足の下に置くまでは、我が右に坐せよ」と。三七ダビデ自ら彼を主と言ふ、されば争でその子ならんや」

三八 大なる群衆は喜びてイエスに聴きたり。三八イエスその教のうちに言ひたまふ「學者らに心せよ、彼らは長き
三九 衣を着て歩むこと、市場にての敬禮、三九會堂の上座、饗宴の上席を好み、四〇また寡婦らの家を呑み、外見をつく
四〇 りて長き祈をなす。その受くる審判は更に厳しからん」

四一 四一イエス賽錢函に對ひて坐し、群衆の錢を賽錢函に投げ入るるを見給ふ。富める多くの者は、多く投げ入れ
四二 しが、四二一人の貧しき寡婦きたりて、レプタ二つを投げ入れたり、即ち五厘ほどなり。四三イエス弟子たちを呼び
四三 寄せて言ひ給ふ「まことに汝らに告ぐ、この貧しき寡婦は、賽錢函に投げ入るる凡ての人よりも多く投げ入れた
四四 り。四四凡ての者は、その豊なる内よりなげ入れ、この寡婦は其の乏しき中より、凡ての所有、即ち己が生命の料
四五 をことごとく投げ入れたればなり」

第二章
一 イエス宮を出で給ふとき、弟子の一人いふ「師よ、見給へ、これらの石、これらの建造物、いか
二 に盛ならずや」ニイエス言ひ給ふ「なんぢ此等の大なる建造物を見るか、一つの石も崩されずして
三 は石の上に残り」

四三 三 オリーブ山にて宮の方に對ひて坐し給へるに、ペテロ、ヤコブ、ヨハネ、アンデレ竊に問ふ、四「われらに告
五 げ給へ、これらの事は何時あるか、又すべて此等の事の成し遂げられんとする時は、如何なる兆あるか」五一エ

イ大九・二七を見よ 二羅一・三、四 ト太二三・六 路一一 又約八・二〇 一二・三〇、二二・ヨ路一九・四四
口母後二三・二 提後 ホ(約二二・九) 四三 九 眞錢貨 太一〇・二 四 太二一・一を見よ 約四・一
三・二六 後後一・ へ三八・四〇 太二三 子路二〇・四七 九 一三三 太二四 一 約八・二四を見よ
二一 二一七 路二〇・ 四一 四四 路二二 一 一五一 路二二 一 一五一 路二二 一 一五一 路二二 一
ハ詩二一〇・一 四五一四七 四一 四 一 一五一 路二二 一 一五一 路二二 一 一五一 路二二 一 一五一 路二二 一
ソ耶二九・八 弗五・六 六・一一三、一一二

・七 賽二六・三、四 ウ太一〇・一七を見よ
 約一四・一 井太二四・二四、二八
 ラ太一〇・一七 約貳 一九 西一・六、二
 ム太五・二二を見よ ノ一―一三 太一〇
 ヤ米七・六 太二四・ケ 詩二三・四一六 但
 フ但九・二七 太二四 テ但九・二六、一二
 一〇 路二 一〇 路二
 マ太二四・九 路二一
 ・一七 約一五・二一
 一〇・三三―三八
 一〇・三三―三八
 工路二三・二九を見よ
 キ太七・一五を見よ
 (徒二〇・三〇) 羅 四・四八を見よ
 一〇 路二 一〇 路二
 コ太二四・一六 路二
 ア可一〇・六
 サ路一七・二三
 一六・一七、一八 西
 二・八 多一・一〇
 約(七)
 ユ太二四・二四 約
 四・四八を見よ

六 ス語り出で給ふ「なんぢら人に惑されぬやうに心せよ。六 多くの者わが名を冒し來り「われは夫なり」と言ひて
 七 多くの人を惑さん。七 戦争と戦争の噂とを聞くととき懼るな、斯る事はあるべきなり、然れど未だ終にはあらず。
 八 即ち「民は民に、國は國に逆ひて起たん」また處々に地震あり、饑饉あらん、これらは産の苦難の始なり。
 九 汝等みづから心せよ、人々なんぢらを衆議所に付さん。なんぢら會堂に曳かれて打たれ、且わが故により
 一〇 て、司たち及び王たちの前に立てられん、これは證をなさん爲なり。一〇 斯て福音は先もろもろの國人に宣傳へら
 二 べし。二 人々なんぢらを曳きて付さんとき、何を言はんと預じめ思ひ煩ふな、唯そのとき授けらるることを言
 三 へ、これ言ふ者は汝等にあらず聖靈なり。三 兄弟は兄弟を、父は子を死にわたし、子らは親たちに逆ひ立ちて死
 三 なしめん。三 又なんぢら我が名の故に凡ての人に憎まれん、然れど終まで耐へ忍ぶ者は救はるべし。
 四 「荒す悪むべき者」の立つべからざる所に立つを見ば(讀むもの悟れ)その時ユダヤに在る者どもは、山
 一六五 に遁れよ。一五 屋の上を在る者は、内に下るな。また家の物を取り出さんとて内に入るな。一六 畑に在る者は上衣を
 一八七 取らんとて歸るな。一七 其の日には孕りたる女と、乳を哺する女とは禍害なるかな。一八 この事の、冬おこらぬやう
 一九 に祈れ、一九 その日は患難の日なればなり。神の萬物を造り給ひし開闢より今に至るまで、斯る患難はなく、また
 二〇 後にもなからん。二〇 主その日を少くし給はずば、救はるる者、一人だになからん。然れど其の選び給ひし選民の
 二 爲に、その日を少くし給へり。二 其の時なんぢらに「視よ、キリスト此處にあり」「視よ、彼處にあり」と言ふ
 三 者ありとも信ずな。三 偽キリスト・偽預言者ら起りて、徴と不思議とを行ひ、爲し得べくば、選民をも惑さんと

三 するなり。二三 汝らは心せよ、預じめ之を皆なんぢらに告げおくなり。

二四 其の時、その患難ののち、日は暗く、月は光を發たず。二五 星は空より隕ち、天にある萬象、震ひ動かん。

二六 其のとき人々、人の子の大なる能力と榮光とをもて、雲に乗り來るを見ん。二七 その時かれは使者たちを遣して、地の極より天の極まで、四方より、其の選民をあつめん。

二八 無花果の樹よりの譬を學べ、その枝すでに柔かくなりて葉芽めば、夏の近きを知る。二九 斯のごとく此等の

三〇 ことの起るを見ば、人の子すでに近づきて門邊にいたるを知れ。三〇 誠に汝らに告ぐ、これらの事ごとごとく成る

三二 まで、今の代は過ぎ逝くことなし。三一 天地は過ぎゆかん、然れど我が言は過ぎ逝くことなし。三二 その日その時を

三三 知る者なし。天にある使者たちも知らず、子も知らず、ただ父のみ知り給ふ。三三 心して目を覺しをれ、汝等その

三四 時の何時なるかを知らぬ故なり。三四 例へば家を出づる時その僕どもに權を委ねて、各自の務を定め、更に門守

三五 に、目を覺しをれと、命じ置きて遠く旅立したる人のごとし。三五 この故に目を覺しをれ、家の主人の歸るは、夕

三六 か、夜半か、鶏鳴くころか、夜明か、いづれの時なるかを知らねばなり。三六 恐らくは俄に歸りて、汝らの眠れる

三七 を見ん。三七 わが汝らに告ぐるは、凡ての人に告ぐるなり。目を覺しをれ』

一 さて過越と除酵との祭の二日前となりぬ。祭司長・學者ら詭計をもてイエスを捕へ、かつ殺さんと企てて言ふ、『祭の間は爲すべからず、恐らくは民の亂あるべし』

第一四章

三 イエス、ベタニヤに在して、癩病人シモンの家にて食事の席につき居給ふとき、或女、價高き混なきナル

- イ 彼後三・一七 一四・六二 四 弗六・一八 西ワ(可一四・三〇) 夕可一三・三五 彼前 一・五五、一三三・一
- ロ 番一・二五 ホ 提後二・一を見よ 四・二 撒前五・六 力可六・四八(太一四 五・八 (可一四・一一)) 一八
- ハ 彼後三・一〇 へ 彼前四・七 二太二四・三七 雅五 又太二五・一三 路一 七太二四・四二を見よ 三 羅一三・一一を見よ 五 路二二・一二 三 太二二・一四を見よ 一 三三・九 太二六・六 三 約一二・三(太二六
- ニ 太一六・二七を見よ 九 二・四〇、二一・三 可一三・三七 二 出二二・一一 約一 一三(路七・三七) 七
- 但七・二三、一四可 九

ム太一八・二八を見よ オ一〇・一一 太二六
 ウ申一五・二一 太二二 二四一・一六 路二
 六・二二 約一二・八 二・三三六
 申約一九・四〇を見よ ク約六・七一
 ノ太二六・一三 ヤ一・二一 六 太二六 ケ申一六・五六 路
 エ路二二・一一(路二) 二・二四、二二一
 二七 路二 二二・七 五(前五) 七(後五)
 七(可一四・一) 七(約一六・四) 三〇)
 ア一七・二二 太二六
 コ路三・二〇 二二・二四 路二
 二・二四、二二一

四 下の香油の入りたる石膏の壺を持ち來り、その壺を毀ちてイエスの首に注ぎたり。四 ある人々、憤ほりて互に言

五 ふ「なに故かく濫に油を費すか、五 この油を三百デナリ餘に賣りて、貧しき者に施すことを得たりしものを」

六 而して甚く女を咎む。六 イエス言ひ給ふ「その爲すに任せよ、何ぞこの女を惱ますか、我に善き事をなせり。七

七 貧しき者は、常に汝らと借にをれば、何時にても心のままに助け得べし、然れど我は常に汝らと借にをらず。

八 此の女は、なし得る限をなして、我が體に香油をそそぎ、預じめ葬りの備をなせり。九 誠に汝らに告ぐ、

九 全世界、何處にても、福音の宣傳へらるる處には、この女の爲しし事も記念として語らるべし」

一〇 爰に十二弟子の一人なるイスカリオテのユダ、イエスを賣らんとて祭司長らの許にゆく。二 彼等これを聞

きて喜び、銀を與へんと約したれば、ユダ如何にか機好くイエスを付さんと謀る。

二三 除酵祭の初の日、即ち過越の羔羊を屠るべき日、弟子たちイエスに言ふ「過越の食をなし給ふために、我

二四 らが何處に往きて備ふることを望み給ふか」二三 イエス二人の弟子を遣さんとして言ひたまふ「都に往け、然らば

二五 水をいれたる瓶を持つ人、なんぢらに遇ふべし。之に従ひ往き、二四 その入る所の家主に「師いふ、われ弟子らと

二六 共に過越の食を爲すべき座敷は何處なるか」と言へ。二五 然らば調へ備へたる大なる二階座敷を見すべし。其處に

二七 我らのために備へよ」二六 弟子たち出で往きて都に入り、イエスの言ひ給ひし如くなるを見て過越の設備をなせ

二七 日暮れてイエス十二弟子とともに往き、一八 みな席に就きて食するとき言ひ給ふ「まことに汝らに告ぐ、

一九 我と共に食する汝らの中の一人、われを賣らん』一九弟子たち憂ひて一人一人『われなるか』と言ひ出でしに、
二〇 イエス言ひたまふ『十二のうち一人にて我と共にパンを鉢に浸す者は夫なり。二一實に人の子は己に就きて録
されたる如く逝くなり。然れど人の子を賣る者は禍害なるかな、その人は生れざりし方よかりしものを』
二三 彼ら食しをる時、イエス、パンを取り、祝してさき、弟子たちに與へて言ひたまふ『取れ、これは我が體
なり』二三 また酒杯を取り、謝して彼らに與へ給へば、皆この酒杯より飲めり。二四 また言ひ給ふ『これは契約の我
二五 が血、おほくの人の爲に流す所のものなり。二五 誠に汝らに告ぐ、神の國にて新しきものを飲む日までは、われ
葡萄の果より成るものを飲まじ』

二六 かれら讚美をうたひて後、オリブ山に出でゆく。
二七 イエス弟子たちに言ひ給ふ『なんぢら皆蹟かん、それは「われ牧羊者を打たん、然らば羊、散るべし」と
二八 録されたるなり。二八 然れど我よみがへりて後、なんぢらに先だちてガリラヤに往かん』二九 時にペテロ、イエスに
三〇 言ふ『假令みな蹟くとも我は然らじ』三〇 イエス言ひ給ふ『まことに汝に告ぐ、今日この夜、鷄ふたたび鳴く前
三一 に、なんぢ三たび我を否むべし』三一 ペテロ力をこめて言ふ『われ汝とともに死ぬべき事ありとも汝を否まず』
三二 弟子たち皆かく言へり。

三三 彼らゲッセマネと名づくる處に到りし時、イエス弟子たちに言ひ給ふ『わが祈る間、ここに坐せよ』三三 斯
三四 てペテロ、ヤコブ、ヨハネを伴ひゆき、甚く驚き、かつ悲しみ出でて言ひ給ふ、三四『わが心いたく憂ひて死ぬばか
三三 (ア)
三三 (ア)

イ詩四一・九 二・一七二・二〇 哥へ來八・六二・一三 六・七、一五〇・一 七・九 哥前一〇・一 七・九 可一四・五〇 可五・
口太二六・二四 約一 前二・二三・二五 利一七・二一 來九 一六 賽三〇・二九 三・一一・三五 三・三一・四二 太二六 三三 七
七・二二 (哥前一〇・一六) 二・四・二二 太二六・三〇 西三 一六 賽三〇・二九 三・一一・三五 三・三一・四二 太二六 三三 七
ハ二二・二五 大二三 二太一四・一九を見よ 二六 二六 一六・一七 七 二四 四 一四・六八・七二 二・四〇・四六 路二 三六 一六
二六・二九 路二 二六 二六・三三・三五 一六 一六 一六・一七 七 二四 四 一四・六八・七二 二・四〇・四六 路二 三六 一六
リ尼八・一〇 詩四七 又太二一・一を見よ 一六 一六 一六・一七 七 二四 四 一四・六八・七二 二・四〇・四六 路二 三六 一六
二六 二六 一六・一七 七 二四 四 一四・六八・七二 二・四〇・四六 路二 三六 一六 二七 四六

ム太二六・四五を見よ ク太二六・四一 哥前 ケ可一四・三五
 ウ羅八・一五 加四・六 一六・二三 フ四三・五〇 大二六 エ可一二・三五
 井來五・七 ヤ羅七・一八―二五 四七・五六 路二 テ詩二二・六一―一八
 ノ太二六・三九を見よ 加五・一七 二・四七―五三 約 賽五三・三一―二二
 才約四・三四 マ來五・七 一八・三一―一 路二二・三七、二四

三三 りなり、汝ら此處に留りて目を覺しをれ』^{三五} 少し進みゆきて、地に平伏し、若しも得べくば此の時の己より過

三六 ぎ往かんことを祈りて言ひ給ふ、^{三六} 『アバ父よ、父には能はぬ事なし、此の酒杯を我より取り去り給へ。されど

三七 我が意のままを成さんとにあらず、御意のままを成し給へ』^{三七} 來りて、その眠れるを見、ペテロに言ひ給ふ『シ

三八 モンよ、なんぢ眠るか、一時も目を覺しをること能はぬか。^{三八} なんぢら誘惑に陥らぬやう目を覺し、かつ祈れ。

三九 實に心は熱すれども肉體よわきなり』^{三九} 再びゆき、同じ言にて祈り給ふ。^{四〇} また來りて彼らの眠れるを見たま

四一 ふ、はその目、いたく疲れたるなり、彼ら何と答ふべきかを知らざりき。^{四一} 三度來りて言ひたまふ『今は眠りて

四二 休め、足れり、時きたれり。視よ、人の子は罪人らの手に付さるるなり。^{四二} 起て、われら往くべし。視よ、我を

四三 賣る者ちかづけり』^{四三} なるほ語りぬ給ふほどに、十二弟子の一人なるユダ、やがて近づき來る、祭司長・學者・長老らより遣され

四四 たる群衆、劍と棒とを持ちて之に伴ふ。^{四四} イエスを賣るもの、預じめ合圖を示して言ふ『わが接吻する者はそれ

四五 なり、之を捕へて確と引きゆけ』^{四五} 斯て來りて直ちに御許に往き『^{四六} ラビ』と言ひて接吻したれば、^{四六} 人々イエス

四七 に手をかけて捕ふ。^{四七} 傍らに立つ者のひとり、劍を抜き、大祭司の僕を撃ちて、耳を切り落せり。^{四八} イエス人々

四九 に對ひて言ひ給ふ『なんぢら強盜にむかふ如く劍と棒とを持ち、我を捕へんとて出で來るか。^{四九} 我は日々なんぢ

五〇 らと偕に宮にありて教へたりしに、我を執へざりき、然れど是は聖書の言の成就せん爲なり』^{五〇} 其のとき弟子

みなイエスを棄てて逃げ去る。

五二ある若者、素肌に亞麻布を纏ひて、イエスに従ひたりしに、人々これを捕へければ、^{五三}亞麻布を棄て裸に逃げ去れり。

五三一人々イエスを大祭司の許に曳き往きたれば、祭司長・長老・學者ら皆あつまる。^{五四}ペテロ遠く離れてイエスに従ひ、^(イ)大祭司の中庭まで入り、下役どもと共に坐して火に煖まりゐたり。^{五五}さて祭司長ら及び全議會、イエ

五五スを死に定めんとて、證據を求むれども得ず。^{五六}夫はイエスに對して偽證する者、多くあれども其の證據あはざりしなり。^{五七}遂に或者ども起ちて偽證して言ふ、^{五八}「われら此の人の「われは手にて造りたる此の宮を毀ち、手に

五六造らぬ他の宮を三日にて建つべし」と云へるを聞けり」^{五九}然れど尙この證據もあはざりき。^{六〇}爰に大祭司、中に立ちイエスに問ひて言ふ「なんぢ何を答へぬか、此の人々の立つる證據は如何に」^{六一}然れどイエス黙して何

六一をも答へ給はず。大祭司ふたたび問ひて言ふ「なんぢは頷むべきものの子キリストなるか」^{六二}イエス言ひ給ふ

六二「われは夫なり、汝ら人の子の、全能者の右に坐し、天の雲の中にありて來るを見ん」^{六三}此のとき大祭司おのが衣を裂きて言ふ「なんぞ他に證人を求めん。^{六四}なんぢら此の瀆言を聞けり、如何に思ふか」かれら舉りてイエス

六四を死に當るべきものと定む。^{六五}而して或者どもはイエスに唾し、又その顔を蔽ひ、拳にて搏ちなど爲始めて言ふ、「預言せよ」^(ヨ)下役どもイエスを受け、手掌にてうてり。

六五ペテロ下に中庭にをりしに、大祭司の婢女の一人きたりて、^{六六}ペテロの火に煖まりをるを見、これに目を注めて「なんぢも、かのナザレ人イエスと偕に居たり」と言ふ。^{六八}ペテロ肯はずして「われは汝の言ふことを

六六

六七

六八

イ五三—六五 太二六 (可一四・六八) へ來九・一を見よ 二・六七—七一 一・一六 可一〇・三四を見よ 二・六四 五七—六八 約一 八可一四・六七 約一 太二六・六三を見よ 九・一—撒前四・六五 徒一四・一四 二・二 六九—七五 路二 二・五五—六二 約 二・二二—二五 提後 八・二—一三、一九 八・一八 二太五・二二を見よ 二六—一六三 太二六 一六 黙一・七 テ利二四・二六 約一 一八・一六—一八、 二二 二二四 二太五・二二を見よ 六三—六五 路二 又可一三・二六 (彼後 九・七 三太二六・六八 路二 一八・一六—一八、 二二 二二二 二二五—二七 二二四—二五 二二四—二五 提後

口 太二六・三を見よ 六二 太二六・六一を見よ 六三—六五 路二 又可一三・二六 (彼後 九・七 三太二六・六八 路二 一八・一六—一八、 二二 二二二 二二五—二七 二二四—二五 二二四—二五 提後

ナ(可一四・五四) 井野後七・一〇 二二三約一八・二九 ケ約一一・四七、四八
 ラ可一四・六八 ノ太二七・一を見よ 一三八 フ徒三・一四
 ム太二六・七三 路二 オ太五・二二を見よ ヤ太二七・一二を見よ コ賽五三・九
 二・五九 ク二一五 太二七・一 マ詩二・六耶二三・五
 ウ可一四・三〇、七二 一―一四 路二三・ 徒五・三一

六九 知らず、又その意をも悟らず』と言ひて庭口に出でたり。六九 婢女かれを見て、また傍らに立つ者どもに『この人は、かの黨與なり』と言ひ出でしに、七〇 ペテロ重ねて肯はず。暫くしてまた傍らに立つ者どもペテロに言ふ『なんぢは慥に、かの黨與なり、汝もガリラヤ人なり』七二 此の時ペテロ盟ひ、かつ誓ひて『われは汝らの言ふ其の人を知らず』と言ひ出づ。七三 その折しも、また鶏鳴きぬ。ペテロ『にはとり二度なく前に、なんぢ三度われを否まん』とイエスの言ひ給ひし御言を思ひいだし、思ひ反して泣きたり。

第一五章

一 夜明るや直ちに、祭司長・長老・學者ら、即ち全議會ともに相議りて、イエスを縛り曳きゆきて、ピラトに付す。ニピラト、イエスに問ひて言ふ『なんぢはユダヤ人の王なるか』答へて言ひ給ふ『なんぢの言ふが如し』三 祭司長ら、さまざまに訴ふれば、四 ピラトまた問ひて言ふ『なににも答へぬか、視よ、如何に多くの事をもて訴ふるか』五 されどピラトの怪しむばかりイエス更に何を答へ給はず。

六 さて祭の時には、ピラト民の願に任せて、囚人ひとりを赦す例なるが、七 爰に一揆を起し、人を殺して繋かれをる者の中に、バラバといふ者あり。八 群衆すすみ來りて、例の如くせんことを願ひ出でたれば、九ピラト答へて言ふ『ユダヤ人の王を赦さんことを願ふか』一〇 これピラト、祭司長らのイエスを付ししは、嫉に因ると知る故なり。一一 然れど祭司長ら群衆を唆かし、反つてバラバを赦さんことを願はしむ。一二 ピラトまた答へて言ふ『さらば汝らがユダヤ人の王と稱ふる者を我いかに爲べきか』一三 人々また叫びて言ふ『十字架につけよ』一四 ピラト言ふ『そも彼は何の悪事を爲したるか』かれら烈しく叫びて『十字架につけよ』と言ふ。一五 ピラト群衆の望を

ム太二七・五〇 路二ノ四〇、四一 太二七マ四二一四七 太二七 二五、三八 (二七) 四五
 三・四六 (約一九) 五五、五六 路二三 五七約一九・三八 サ太二七・五六を見よ 一約一九・三九、エ可九・一五を見よ
 (三〇) 四九約一九・二五 三・五〇一五六 約 二太二七・五七 路二 キ一八 太二八・一 四〇
 ウ太二七・五一を見よ オ(路一九・三) 一九・三八一四二 三・五〇、五一約一 一八 路二四・二一 ミ三、四 太二七・六〇
 井太二七・五四 可一 ク可一六・一 ケ太二七・六二を見よ 九・三八 一〇(約二〇・一) を見よ 可一五・四
 五・四四、四五 路 ヤ太二七・五五、五六 フ(太二七・五七) テ(約一九・三八) ア可一五・三九、四四、ユ可一五・四〇、四七 シ(約二〇・一一、一
 二二・四七) を見よ コ路二三・五一、二

七 せて葦につけ、イエスに飲しめて言ふ『待て、エリヤ來りて、彼を下すや否や、我ら之を見ん』三七 イエス大聲を
 三九八 出して息絶え給ふ。三八 聖所の幕、上より下まで裂けて二つとなりたり。三九 イエスに向ひて立てる百卒長、かかる
 四〇 様にて息絶え給ひしを見て言ふ『實にこの人は神の子なりき』四〇 また遙に望み居たる女等あり、その中にはマダ
 四一 ダラのマリヤ、小ヤコブとヨセとの母マリヤ及びサロメなども居たり。四一 彼らはイエスのガリラヤに居給ひしと
 き、從ひ事へし者どもなり。此の他イエスと共にエルサレムに上りし多くの女もありき。

四二 日既に暮れて、準備日、即ち安息日の前の日となりたれば、四三 貴き議員にして、神の國を待ち望める、ア
 四四 リマタヤのヨセフ來りて、憚らずピラトの許に往き、イエスの屍體を乞ふ。四四 ピラト、イエスは早や死にしかと
 四五 訝り、百卒長を呼びて、その死にしより時經しや否やを問ひ、四五 既に死にたる事を百卒長より聞き知りて、屍體
 四六 をヨセフに與ふ。四六 ヨセフ亞麻布を買ひ、イエスを取下して之に包み、岩に鑿りたる墓に納め、墓の入口に石を
 四七 轉ばし置く。四七 マグダラのマリヤとヨセの母マリヤとイエスを納めし處を見たり。

第一章

一 安息日終りし時、マグダラのマリヤ、ヤコブの母マリヤ及びサロメ往きて、イエスに抹らんとて
 二 香料を買ひ、二一 週の首の日、日の出でたる頃いと早く墓にゆく。三 誰か我らの爲に墓の入口より
 五四 石を轉ばすべきと語り合ひしに、四 目を擧ぐれば、石の既に轉ばしあるを見る。この石は甚だ大なりき。五 墓に
 六 入り、右の方に白き衣を著たる若者の坐するを見て甚く驚く。六 若者いふ『おどろくな、汝らは十字架につけら

七 れ給ひしナザレのイエスを尋ねれど、既に甦へりて、此處に在さず。視よ、納めし處は此處なり。七 然れど往きて、弟子たちとペテロとに告げよ「汝らに先だちてガリラヤに往き給ふ、彼處にて調ゆるを得ん、曾て汝らに言ひ給ひしが如し」
 八 女等いたく驚きをののき、墓より逃出でしが、懼れたれば一言をも人に語らざりき。

九 「一週の首の日の拂曉、イエス甦へりて先づマグダラのマリヤに現れたまふ、前にイエスが七つの悪鬼を逐ひいだし給ひし女なり。一〇 マリヤ往きて、イエスと偕にありし人々の、泣き悲しみ居るときに之に告ぐ。二 彼らイエスの活き給へる事と、マリヤに見え給ひし事とを聞けども信ぜざりき。

三 此の後その中の二人、田舎に往く途を歩むほどに、イエス異りたる姿にて現れ給ふ。三 此の二人ゆきて、他の弟子たちに之を告げたれど、なほ信ぜざりき。

四 其のち十一弟子の食しをる時に、イエス現れて、己が甦へりたるを見し者どもの言を信ぜざりしにより、其の信仰なきと、其の心の頑固なるを責め給ふ。五 斯て彼らに言ひたまふ「全世界を巡りて凡ての造られしものに福音を宣傳へよ。一六 信じてバプテスマを受くる者は救はるべし、然れど信ぜぬ者は罪に定めらるべし。

七 信する者には此等の徴、ともなはん。即ち我が名によりて悪鬼を逐ひいだし、新しき言をかたり、一八 蛇を握るとも、毒を飲むとも、害を受けず、病める者に手をつけなば癒えん」

イ可一・二四を見よ 約二一・二、二四 リ可一六・九を見よ カ太二八・一九 レ徒二・四、一〇・四 ツ可五・二三を見よ
 口太二八・六 路二四 へ約二〇・二八 又可一六・一一を見よ ヨ約三・一八、三六 六、一九・六 哥前
 六六 太二八・二七 可一 路(路二四・三六 約二 一・一〇、二八、三
 八太二六・三二を見よ 六・一三、一四 路二 〇・一九、二六 哥前 夕(可九・三八 路一〇 〇、一三・一、一四
 二太二七・五六を見よ 四・一一 (路二四・ 一五・五) 一七 徒五・二六、 二一四〇)
 約二〇・一四 四一(約二〇・二五 可一六・九を見よ 八・七、一六・二八、 ソ(路一〇・一九 徒
 亦可一六・一二、一四 チ路二四・一三—三五 可一六・一一を見よ 一九・二二) 二八・三—五)

本(徒一・三) ラ路三二・六九 徒七 一三・二 徒前三。
 ナ路九・五一、二四。 五五、五六 羅八。 二二
 五一(約六・六二) 三四 弟一・二〇 五徒五・二二、一四。
 二〇・一七 徒一・二 西三・一 來一・三、 三 來二・三、四
 提前三・一六 八・二、一〇、二二、

一九 語り終へてのち、主イエスは天に擧げられ、神の右に坐し給ふ。弟子たち出でて、徧く福音を宣傳へ、
 主も亦ともに働き、伴ふところの徴をもて、御言を確らし給へり。

マルコ傳・福音書 をはり

- 一・一 異本「神の子」なし。
- 三・一六 異本「此の十二人を擧げて」の句なし。
- 七・一六 諸異本「聴く耳あるものは聴くべし」この句あり。
- 九・二九 異本「祈さ斷食に由らざれば」さあり。
- 九・四四 異本 四四及び四六の二節に、この書の四八さおなじ句あり。
- 一一・一 舊譯「橄欖山」さあり。
- 一一・九 「ホサナ」は「救あれ」この意なり。
- 一一・二六 異本「もし汝ら免さずば天に在す汝らの父も亦汝らの罪を免し給はじ」さあり。
- 一二・二三 諸異本「彼らみな甦へらんに」の句なし。
- 一三・二五 或は「天にある諸の勢力」さ譯す。
- 一三・二九 「人の子」或は「時」さ譯す。
- 一三・三三 異本「目を覺し、かつ祈れ」
- 一四・三六 「父」の義なり。
- 一四・四五 「師」の義なり。
- 一四・六八 異本六八節の末に「時に鶏なきぬ」さいふ句あり。
- 一五・四 或は「重大なる事」さ譯す。
- 一五・二八 異本「彼は罪人と共に數へられたりさいへる聖書は成就したり」さあり。
- 一六・九 異本九節以下を缺く。